

苫小牧市美術博物館 紀要

第10号

(苫小牧市博物館 館報 通算21号、苫小牧市博物館研究報告 通算33号)

苫小牧市における博物館施設の歩み

武田 正哉

谷内六郎(1921-1981)と苫小牧—壁画《芽の出る音》(1972年)をめぐって

立石 絵梨子

苫小牧市内出土ガラス玉の歴史的な位置づけについて—他地域出土品との比較を中心に—

田村 朋美・高橋 美鈴・岩波 連

(令和6年度)

苫小牧市美術博物館

苫小牧市における博物館施設の歩み

武田 正哉¹

はじめに

令和7(2025)年、苫小牧市美術博物館は昭和35(1960)年6月10日に前身となる苫小牧市立図書館郷土博物室が開設されてから65年、現在の施設が昭和60(1985)年11月3日に苫小牧市博物館として開館してから40年の節目を迎える。さらに昭和30(1955)年に苫小牧市が全道の市町村に先駆けて「苫小牧市文化財保護条例」を制定してから70年目にあたる。本論では、これまでの苫小牧市の博物館施設と文化財保護の歩みを中心に振り返り、今後の館の活動のありかたについて考えてみたい。

1. 市立図書館郷土博物室の設立

苫小牧市における公民館、図書館、博物館の歴史は昭和20(1945)年に町の庶務課教育係に配属された1人の職員によって始まる。平成4(1992)年に苫小牧市文化賞、翌5(1993)年には北海道博物館協会賞、平成9(1997)年に北海道の文化財保護に功績のあった者に与えられる北海道文化財功労賞を受賞した2代市立苫小牧図書館長小野慶郎(1917-2003)である。小野⁽¹⁾は大正6(1917)年に空知郡歌志内村(現・歌志内市)に生まれ、親の転職により大正15(1926)年に苫小牧町大字苫小牧59番地(現・苫小牧市本町)に移り住んだ。生来病弱で内向的な少年であったが、移住後はスケートに親しみ、自然に恵まれた環境で山の幸を味わい、生まれ故郷にはなかった海で遊ぶなど、移住先の良さが分かるにつれて新たな郷土への愛着が育まれたという。昭和11(1936)年に苫小牧町役場に就職するが、昭和13(1938)年に召集され満州へ出征する。しかし、強行軍や夜間の実践訓練など体力のない小野にとっては苦しい軍務が続き、胸膜炎で陸軍病院へ緊急入院し、療養生活は半年以上に及んだ。ただし、この療養期間に満州の歴史や文学を学ぶべく病院へ資料を取り寄せたほか、体力をつける目的で図書館や博物館に足繫く通ったことが、後に本市の社会教育施設の設立へと繋がる。



図1. 小野慶郎の出征 昭和13(1938)年「真実の探求 上巻」より

終戦後、小野は私立北海中学校(現・北海高等学校)の先輩でもある苫小牧町庶務課長大泉源郎(1910-2005)の勧めにより一度退職した苫小牧町役場に復職⁽²⁾、庶務課教育係に配属される。そして戦後の混乱期にあって教育行政を担当するなかで、学校教育と共に社会教育の重要性と必要性を痛感する。その拠点となる施設の確保を考え、昭和21(1946)年11月、旧軍人会館の内部を改装した苫小牧町公民館集会室の一面に書庫を設置し、寄贈書籍312冊を閲覧できる図書室を開設した。これが苫小牧における公的図書館の始まりとなる。昭和26(1951)年4月1日には、旧市立病院大正11(1922)年築 旧門脇呉服店(現存せず)を使用し、公共図書館として正式に市立苫小牧図書館が開館。翌27(1952)年11月1日の苫小牧市教育委員会(以下、市教委)の発足と共に小野は教務課長として、公民館、図書館、博物館の建設と運営に情熱をそそぎ、半生を捧げやり

¹ 勇武津資料館 主査(学芸員)

遂げることを希望するようになる。

社会教育事業が推進される過程において、市教委は昭和27(1952)年から同29(1954)年にかけて、シトキやタマサイ、漆器などのアイヌ民族資料を札幌の古美術商を通じて購入。これは河野広道北海道学芸大学札幌校教授の旧蔵資料などを含み、後年の博物館アイヌ民族部門における基礎資料となった。

一方、昭和25(1950)年5月、文化財の保存と活用を図り、国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的として「文化財保護法」が成立した。法の成立に伴い、文化財が国民共有の財産であり文化財に対する理解と関心を高めるため、昭和29(1954)年11月には「全国文化財保護強調週間」が実施された。これに対応し市教委では、同年11月1日から3日まで、第1回全国文化財保護週間記念「北海道先住民族資料展」を苫小牧市公民館大会議室において開催。指導監修は河野広道教授、企画は図書館司書資格を取得した小野が担当した。出品資料は購入したアイヌ資料1,279点と前例のない大規模な展示会で、新聞報道などにより全道各地からの来館者があり好評を博した。昭和20年代後半に小野が担当した一連の展示会⁽³⁾とその反響は、後の郷土博物室設置の契機となる。



図2. 旧市立病院を改修した市立苫小牧図書館 昭和26(1951)年

また、「文化財保護法」の成立がきっかけとなり、苫小牧市では昭和30(1955)年8月、「苫小牧市文化財保護条例」を、翌年「施行規則」を制定。同条例の制定は北海道の市町村では最も早く、市教委は昭和31(1956)年3月10日に「勇払会所の跡」「蝦夷地開拓移住隊士の墓」を苫小牧市指定史跡に、昭和36(1961)年10月4日には「勇払恵比須神社奉納品21点」を苫小牧市指定民俗文化財にそれぞれ指定している。

昭和35(1960)年1月、小野は苫小牧市旭町に新設された市立苫小牧図書館(現存せず)に専任館長として就任。館の運営に携わるとともに、苫小牧市教育長森田勇(1911-2009)をはじめ、交流のあった市立函館博物館館長竹内収太(1905-1982)や釧路市立郷土博物館館長片岡新助(1895-1988)らの勧めもあり学芸員資格を取得した。一方、社会教育施設や事業を充実させる市教委の動きと連動して小野が率先して有志を募り「苫小牧郷土文化研究会」(初代会長 門脇松次郎⁽⁴⁾)の設立総会が同年4月に図書館で開催された。苫小牧郷土文化研究会は苫小牧市の歴史・文化・自然について調査研究を行う一方で、市教委と連携をして遺跡の発掘調査協力や自然保護運動を行ったほか、市に対して博物館建設を陳情するなど本市の文化発展に尽力する。同年6月1日、全館開館した新図書館1階には、郷土博物資料をケース10台に展示する郷土博物室が開設された。資料は苫小牧地方の教育、学術及び文化の発展に寄与する目的で収集され、昭和20年代後半から市内の遺跡で発掘された土器や石器などの考古資料、アイヌ民族資料、勇払会所関係文書などの他、樽前山の古文書や噴火写真などが展示された。当初、収集に手が回らなかった自然史資料に関しては「植物鉍物標本は館員が主体となって、昆虫標本は学校の協力によって、動物標本は本年度は苫小牧に産する小哺乳類と鳥類を剥製としたものを奉仕的協力によって収集する計画である。」⁽⁵⁾とした。



図3. 市立苫小牧図書館郷土博物室 昭和41(1966)年

2. 苫小牧市青少年センターの開館

北海道において博物館施設が増加し始めるのは、昭和30(1955)年代からである。当時、北海道教育委員会は、教育行政執行方針のなかで、青少年をとりまく社会環境の整備として、施設の整備拡充を重点とすると述べた。その実績は、昭和35(1960)年から39(1964)年までに開設した博物館等施設が40館園であったのが、昭和40(1965)年から44(1969)年までには90館園を数えるまでになったことで理解できる⁽⁶⁾。

昭和36(1961)年6月1日、小樽市海員会館で開催された北海道博物館連絡会議において16館の加盟館園をもって北海道博物館協会が発足した。初代会長には市立函館博物館館長の武内収太が就任し、小野は理事として新たに立ち上げられた協会を支えた。北海道博物館協会は、翌37(1962)年7月に第1回大会を函館市において開催する。

苫小牧市では小規模とはいえ郷土博物室が設置され、苫小牧郷土文化研究会が設立されたことにより、市民の郷土の歴史や文化、自然に対する関心は高まりをみせた。市内遺跡の発掘調査は昭和28(1953)年10月に市教委が植苗美沢の平田遺跡を河野広道北海道学芸大学札幌校教授の指導により行ったことが最初で、次第に郷土文化研究会会員や市内中学校・高校の郷土史研究部部員などの参加がみられるようになる。さらに、後の発掘調査では考古学以外の専門分野の研究者が参加し大きな成果を得ることになった。専門分野が異なる研究者が調査に参加、報告書を作成、その成果を展示や教育普及事業に生かすという後の博物館・埋蔵文化財調査センターの活動が、ここで芽生えたといつてよい。また、江戸時代から本州の移住者が多かった勇払地区では、住民が地域に残された歴史を独自に調査し、昭和37(1962)年6月には苫小牧



図4. アイヌ丸木舟発掘調査 昭和41(1966)年
写真中央 帽子をかぶる人物が佐藤一夫

市立勇払中学校敷地内において後に北海道指定史跡となる「開拓使三角測量勇払基点」を発見している。さらに昭和41(1966)年7月には、沼ノ端を流れる旧勇払川稔橋下流80メートル程の右岸からアイヌ民族の丸木舟5艘と推進具が発見され、市教委が北海道大学北方文化研究施設大場利夫教授の指導の下、苫小牧郷土文化研究会など市民の協力を得て発掘調査を行った。これまで見られない完全な形状を持つ大型舟の引き上げには大変な困難が伴い、当初は短期間で完了すると思われた引き上げ作業に9日間を要した。舟のうち3艘はアイヌ語でチプと呼ばれる河川や湖沼で使用される丸木舟で、残りの2艘は文献には記されているものの現存が確認されていなかったイタオマチプという板綴舟であることが判り、推進具とともに翌42(1967)年6月に北海道指定有形文化財となった。市教委が務めた発掘調査事務局には図書館長の小野をはじめ、楠野四夫図書館管理係長⁽⁷⁾、堀江敏夫図書館主事⁽⁸⁾、佐藤一夫図書館郷土博物室学芸員⁽⁹⁾があたり中心的な役割を果たした。後に彼らは苫小牧市博物館・埋蔵文化財調査センター・苫小牧市立中央図書館建設の推進力となっていった。

昭和42(1967)年、北海道開拓百年記念事業の一環として、北海道の補助を受け相応しい事業を計画するようという呼びかけに対して、小野は「苫小牧郷土博物館建設計画」を立て申請を行った。これは道の審査を経



図5. 苫小牧市青少年センター 昭和47(1972)年

て、当初の博物館施設計画に大幅な内容変更をし、科学館的要素を取り入れた計画を再申請することにより認可された。昭和45(1970)年1月15日、開道100年記念・百年補助事業として、博物展示と科学展示を併設する「苫小牧市青少年センター（現・苫小牧市科学センター）」が開館する。1階は北海道指定有形文化財「アイヌ丸木舟および推進具」をメイン展示に、郷土博物室から移動した市内遺跡の考古資料やアイヌ資料、郷土の自然をテーマとしたジオラマ展示や剥製標本などの博物展示室と児童生徒の授業に対応可能な実験教室。2階、屋上にはプラネタリウムと大型望遠鏡を備えた天体気象観測室を設置した他、科学の体験展示などが配置された。開館に至るまで、小野は図書館長と苫小牧市青少年センター設立準備室長を兼務したが、開館に伴い依願退職し、後任の館長に独立した苫小牧郷土博物館の建設計画を引き継いだ⁽¹⁰⁾。その後、小野は郷土博物館の資料収集委員や苫小牧市博物館建設懇談会の委員のほか苫小牧郷土文化研究会副会長などを歴任し、自身が思い描いていた博物館構想の実現に向け側面的に協力をしていく。



図6. 苫小牧郷土文化研究会 明野アオサギコロニー確認調査
昭和40(1965)年
左から中居正雄、楠野四夫、門脇松次郎、小野慶郎

3. 苫小牧市博物館・苫小牧市埋蔵文化財調査センターの開館

昭和46(1971)年6月に博物館法における登録博物館に指定された苫小牧市青少年センターでは、市民会館を主会場とした北海道文化財保護協会総会の分科会が開かれた他、翌47(1972)年6月には、第11回北海道博物館協会大会が開催されるなど、胆振地方における中核的な博物館施設としての活動が続いた。一方、当時の苫小牧は「苫小牧東部大規模工業基地」問題が取り沙汰されていた時期であり、開発に伴う自然破壊や埋蔵文化財の保護が市民の大きな関心事となっていた。これに呼応し、苫小牧郷土文化研究会では紀藤義一⁽¹¹⁾が中心となりウトナイ湖のハクチョウ生態調査や明野地区のアオサギコロニー確認調査、開発により減少しつつあるハスカップの保存活動、さらに北海道苫小牧東高等学校教諭の中居正雄⁽¹²⁾によるウトナイ湖の植生調査が継続的に行われ、苫小牧地域の自然史研究に新知見をもたらした。こうした調査は自然保護対策に大きく貢献し、一連の活動は後の公益財団法人日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリの開設【昭和56(1981)年5月】、ウトナイ湖のラムサール条約登録湿地指定【平成3(1991)年12月】、環境省と苫小牧市が共同管理するウトナイ湖野生鳥獣保護センターの開設【平成14(2002)年7月】へと繋がっていった。一方、埋蔵文化財の保護については、昭和48(1973)年7月に苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査班が佐藤一夫を班長に3名体制で発足し、分布調査が行われた。昭和51(1976)年からは厚真1・静川1遺跡の発掘調査を皮切りに、昭和59(1984)年まで苫東遺跡内での調査は36遺跡に及んだ。この中には昭和55(1980)年に苫小牧東部国家石油備蓄基地の建設に伴う調査で発見され、後に環壕や竪穴住居跡、墳墓、落とし穴など縄文時代の生活の痕跡のほか、石器、土器など約18万点の道具類が見つかった静川16遺跡も含まれていた。同遺跡は、縄文時代中期の環壕遺跡も含む学術的にも大変貴重な遺跡であることが評価され、昭和62(1987)年1月8日に「静川遺跡」として苫小牧市初の国指定史跡に指定されている。また、この時期には「市指定文化財」の調査研究が進んだことも特筆される。市教委と苫小牧郷土文化研究会は、昭和30年代に行われた市指定文化財を見直すばかりでなく、その保存・関心を深めるという意図をもって、新たな調査を行い、市指定文化財の記述の誤りや新たな発見、文化財の修復や復元の措置を講じた。これは『苫小牧地区自然保護関係調査報告書 昭和49年度(総集編)』として報告され、昭和54(1979)年7月

「林重右衛門墓碑」、同年12月「錦岡樽前山神社円空作樽前権現像及び奉納品7点」、昭和59(1984)年4月「勇武津不動及び奉納品7点」が新たに市指定文化財に指定された。これはこれまで培ってきた共同調査の成果が新指定に結びついたとすることができる。

一方、苫小牧郷土文化研究会は、昭和37(1962)年10月、翌年の苫小牧市開基90周年、市制施行15周年と苫小牧工業港の開港の記念事業の一環として苫小牧市、市議会、市教委に対し、所蔵資料の一部しか展示できない狭隘な郷土博物室の現状を改善するため陳情書「市立博物館及び動物園の設置について」を提出した。しかし、この陳情は採択されたものの施設の設立までに至ることはなかった。それから10年の歳月が経過した昭和47(1972)年2月、同研究会は、翌年の開基百年事業の一環として通算3度目となる博物館建設の要望書を市に提出し、これが採択され博物館建設が決定する。翌48(1973)年12月には「郷土博物館資料収集調査委員会」(委員長 門脇松次郎)が設置され、資料の収集と調査が着手された。さらに昭和55(1980)年7月には「苫小牧市博物館建設懇話会」(会長 門脇松次郎)が設置され、基本構想の策定に入り、翌56(1981)年11月には「苫小牧市博物館基本構想案」が決定され建設懇話会は、建設準備委員会へと移行された。しかし、問題は膨大な建設予算であり、苫小牧市は建設財源の確保に苦慮していた。こうした状況下において、考古学を専門とする苫小牧市青少年センター学芸員佐藤一夫の周辺には国庫補助により建設できる埋蔵文化財センター建設に関する情報が入っており、釧路市が昭和52(1977)年に国庫補助により釧路市埋蔵文化財調査センターを建設したことを参考にして苫小牧市は検討を始める。その結果、昭和57(1982)年1月に開催された第1回苫小牧市博物館建設準備委員会において、釧路市と同様に埋蔵文化財調査センターに博物館を併設させる構想が審議され、翌58(1973)年3月には博物館建設の基本計画がまとめられ、同年9月20日の苫小牧市議会第14回定例会において博物館、埋蔵文化財調査センター建設事業費の予算が議決された。これにより既に着工予定であった「カルチャーパーク構想」の一環として、苫小牧市末広町の北海道苫小牧工業高等学校跡隣接地に同センターを建設し、博物館を併設することが決定する。埋蔵文化財調査センターは国の補助を受け、昭和60(1985)年4月1日に開所。同年9月には博物館の展示工事が完了し、11月1日に苫小牧市博物館・苫小牧市埋蔵文化財調査センター落成式典が苫小牧市文化会館において開催された。そして11月3日には末広町地区のカルチャーパーク構想の中心施設として苫小牧市博物館が開館した。



図7. アイヌ丸木舟の搬送 昭和60(1985)年

4. 開館した苫小牧市博物館

苫小牧市博物館の開館初日は8,300人の入館者があり、いかに市民が新しい博物館の開館を待ち望んでいたかを知ることができる。常設展示は「樽前山麓、勇払原野の自然と文化」をテーマとし、エントランスホールは氷河期に大陸から渡ってきたマンモスの親子像をシンボル展示とした。1階「大地の生い立ち」は地層の剥ぎ取り模型や二重根の実物を展示するなど火山活動により形成された大地を紹介し、「原野の生物たち」では勇払原野の植生や湿原の野鳥のジオラマなどが、まさにその場から切り取られたように再現されている。2階「原野のあけぼの」は苫小牧地域で発掘された90点に及ぶ土器がパノラマ風に展示された構成に目を奪われる。「アイヌの暮らし」は北海道指定有形文化財「アイヌ丸木舟および推進具」を露出した状態で、全体を見せることに重点を置き、壮大さが伝わるよう展示された。「開拓のあゆみ」は東京都八王子市の市民から寄贈された八

王子千人同心ゆかりの武具や開拓使美々鹿肉缶詰製造所跡から出土した煉瓦など、近世から近代の苫小牧の歩みを概観できる構成となっている。近現代の苫小牧を映像で振り返る「伸びゆく苫小牧」、住民に生まれたスケートの歴史を紹介する「スケートのまち苫小牧」まで7つの展示コーナーが来館者に過去から現在までの苫小牧の姿を伝える。これらは郷土博物館建設のために、昭和20(1945)年代から始まった資料収集や遺跡発掘調査、文化財の整備、環境保護のための調査など、多くの分野に渡る成果が結実したと言っても過言ではない。また、開館に併せて第1回特別展「苫小牧地方の有形文化財―幕末の美術工芸品にみる勇武津場所―」が開催され、昭和30(1955)年に北海道の市町村で最も早く文化財保護条例を制定し、文化財の所在調査を続けてきた成果の一端を紹介した。

一方、建築は鉄筋コンクリート造、地下1階、地上2階。北海道大学クラーク会館(1959年竣工)や北海道立近代美術館(1977年竣工)を設計した太田實(1923-2004)と(株)都市設計研究所の作品で、埋蔵文化財の持つ重厚感を追求し、縄文土器の迫力に迫ることを狙いとしている。傾斜した壁面にタイルを埋め込むという高度な技術を要した外観を持つ建築物は、昭和62(1987)年の「建築業協会賞」を受賞した。

苫小牧市博物館は翌61(1986)年3月には博物館法における登録博物館に指定され、第1回苫小牧市博物館協議会が門脇松次郎を会長とした8人の委員により開催された。委員には昭和20年代から郷土博物館の建設を夢み、実現に向けて努力した小野慶郎も入り館運営に協力することになった。小野は博物館の機関紙『苫小牧市博物館だより第8号』(昭和62年11月発行)において「博物館は歴史創造の拠点たれ」と題して、博物館が地域で何を果たすのかを提言した。

開館以降、様々な教育普及事業が行われるなか、昭和61(1986)年7月には、高校生以上の市民を対象に苫小牧および北海道の自然・歴史・文化・芸術を主たるテーマに研究者や学芸員などを講師とする「博物館大学講座」が開講した。第1講は「文化財について」と題し、苫小牧郷土文化研究会常任理事の小野慶郎が講師を務めた。以降、年9回の講座⁽¹³⁾のうち館学芸員も毎年講師を務め、市民への調査研究成果の発表の場になっている。講座は通算340回を越え現在まで継続している。また、平成元(1989)年8月には、苫小牧市教育研究会社会科部会(当時)と館職員による検討委員会の協議により、市内小学3年生を対象とした「博物館郷土学習」を実施している。博物館が所蔵する豊富な資料を活用し、昔の道具が現在の生活と結びついていることを体験を通して理解し、常設展示の見学を組み合わせることで、子どもたちが将来にわたって博物館を活用する機会に繋がることを目的とした学習は、社会科授業の一環として現在も市内小学校3・4年生を対象に実施されている。郷土学習は、平成2(1990)年10月の「第45回北海道社会科教育研究大会苫小牧大会」の研究主題となったほか、平成3(1991)年7月の「第30回北海道博物館大会苫小牧大会」で紹介され、平成7(1995)年9月には「第18回北海道博物館協会学芸職員部会」の研修テーマとなった。

一方、展示事業は多様な産業が集積している工業都市の特徴を活かして、企業と連携した特別展を開催している。その先駆けとなったのは昭和63(1988)年9月、苫小牧市市制40周年・苫小牧港開港25周年記念・出光興産北海道製油所操業15周年記念特別展「陶磁の東西交流展」であった。



図8. 苫小牧市博物館の開館 昭和60(1985)年11月3日



図9. 苫小牧市博物館 外観

この展示会は出光美術館の精華とも言える名品136点を公開したもので、15日間で8,700人を越える多くの来館者に感銘を与える展示会となった。同製油所共催の展示会は、平成10(1998)年のとまこまい市制50周年記念・苫小牧商工会議所創立50周年・同製油所25周年記念「出光美術館所蔵品ジョルジュ・ルオー展」など、周年毎に開催され道内各地から来館者が訪れ好評を博した。また、平成2(1990)年には、王子製紙株式会社苫小牧工場操業80周年記念・苫小牧市博物館開館5周年記念「紙の文化史展～パピルスから情報紙まで」を同工場の協力により開催。平成22(2010)年には、同工場の100周年と博物館開館25周年を記念して「紙をつくる 紙でつくる」を開催した。

さらに平成14(2002)年には、トヨタ自動車北海道株式会社創業10周年記念事業「印象派とその歩み展～感じたままに瞬間を描く～」をトヨタ自動車株式会社所蔵の絵画28点を展示し開催した。以降、トヨタ自動車北海道株式会社との共催による展示会は原則として

5年毎に開催している。地元企業と連携し、道外の美術館や博物館、企業から貴重な資料や作品を借用公開できることは地方の博物館にとっては稀有なことであり、地元企業の地域貢献への理解があって実現が可能で、開館当初から恵まれた環境にあったと言えるであろう⁽¹⁴⁾。また、姉妹都市との縁による展示会を開催してきたことも特色のひとつである。昭和61(1986)年11月、開館1周年記念特別展「姉妹都市の横顔」が開催された。この展示会は本市と姉妹都市として盟約を提携している、東京都八王子市・栃木県日光市・ニュージーランドネーピア市の歴史や文化、自然などを紹介したもので、会期中には姉妹都市交流についてのパネルディスカッションが開かれたほか、先住民族マオリの人々による演舞が披露された。その後も、姉妹都市交流につながる展示会は続き、平成5(1993)年2月には、苫小牧港開港30周年などを記念し「マオリ文化展～ニュージーランド先住民の生活と文化～」、平成11(1999)年8月には「日光東照宮宝物展～姉妹都市日光の横顔」、翌12(2000)年には、八王子千人同心移住200周年を記念して「八王子千人同心と幕末の勇武津」を開催している。また、館の所蔵資料を姉妹都市で展示したのは、平成8(1996)年3月にネーピア市ホークスベイ博物館で開催した開館10周年記念「二つの島のかげはし～苫小牧市博物館所蔵品展」が最初で、アイヌ民族資料を中心に衣類などの歴史資料、土器や石器の考古資料、自然史の標本資料をネーピア市民にご覧いただいた⁽¹⁵⁾。こうした一連の展示会の開催は、官民一体となって継続してきた姉妹都市交流の成果の一端であると考えられる。

一方、収蔵資料の整理保管や調査研究活動も精力的に行っている。資料は収集委員会が設置され、博物館建設が軌道に乗り始めた昭和55(1980)年以降に急増し、収集資料は市青少年センターと苫小牧市立苫小牧東中学校の敷地内に設置されたプレハブ倉庫などに仮保管されていた。これらの資料は開館に伴い収蔵庫へ移動。さらに市民からの寄贈資料の申し出が相次いだことにより、



図10. 「陶磁の東西交流展」昭和63(1988)年



図11. 「紙の文化史展」平成2(1990)年



図12. 「姉妹都市の横顔展 特別企画」昭和61(1986)年

昭和60(1985)年度にはおよそ10万点に達していた。収蔵庫は地下に4室が設置され、第1収蔵庫はアイヌ民族資料・歴史・民俗資料、第2収蔵庫は化石や標本など自然史系資料、第3収蔵庫は郷土にゆかりの作家を中心に寄贈、購入された美術資料、第4収蔵庫は農機具などの大型資料を取めた。このため収蔵資料の整理保管と、外部への情報提供も兼ねて「所蔵資料目録」の作成を行った。昭和62(1987)年には第1号『鳥類所蔵資料目録』が発刊され、以降アイヌ民族、歴史、民俗、自然分野の資料目録が平成13(2001)年まで全15巻刊行された。この中でも『アイヌ民族資料目録』は昭和20年代後半から収集された館の至宝とも言える1,400点に及ぶ資料を整理したもので、平成10(1998)年には「イクパスイ(捧酒籠)篇」も追加発行された。しかし、年々増加の一途を辿る収蔵資料の保存場所が狭隘となっていることは間もなく顕在化し、現在に至るまで大きな課題となっている。さらに、新たに受け入れる資料にも対応するため、既存の収蔵資料の再整理、館外の収蔵スペースの確保の他、施設の整備を進めることも視野に入れて考えなければならない。これは予算的にも大きな課題と言える。

また、学芸員の調査研究を知っていただく目的で、平成3(1991)年には『研究報告第1号』を刊行した。第1号は考古、民俗、アイヌ民族、教育普及をテーマに学芸員が調査した内容を報告したもので、以降、研究報告は平成14(2002)年の第12号まで刊行された。この中には「苫小牧地方および周辺地域のカミキリムシについて」(共著)や「石狩低地帯北部の完新統自然貝殻層について」など地域の自然について調査した論文がある。さらに、近世ユウフツ場所における絵図や文書についての報告、苫小牧の太平洋戦争遺跡についての調査などの歴史・考古分野の論文。美術では「浅野武彦宛川上澄生書簡」などが調査され、苫小牧地域をテーマとした異なる分野の調査研究が報告された。その後、平成14年度以降には「研究報告」は「年報」と統合され「館報」となり、学芸員および外部研究者の研究成果を掲載し、現在は『苫小牧市美術博物館紀要』へと引き継がれている。

5. 苫小牧市美術博物館の開館

苫小牧に美術館建設を夢み、その実現に向けて最初に行動したのは苫小牧美術協会初代会長を務めた遠藤ミマン(1913-2004)であった。平成2(1990)年11月、遠藤は自らが所蔵する美術作品128点を苫小牧市博物館に寄贈した。博物館では平成4(1992)年5月に「遠藤ミマンコレクション展」を開催。同時に苫小牧市美術館建設基本構想案を作成している。これは実現には至らなかったが美術館開設に向けた最初の試案となった。遠藤ミマンは平成10(1998)年に市内の画家や美術愛好家を中心とした「明日の美術館を夢見る会」(会長 楠野四夫)を設立し、美術作品を市に寄贈するなど美術館建設促進を働きかけた。画家であり教育者でもあった遠藤は、昭和14(1939)年に苫小牧美術協会を立ち上げ、市民絵画サークルの指導をするなど組織をつくり、その中心となり運営・維持をする優れた能力を有していた。明日の美術館を夢見る会の会長を務めた楠野四夫は「小さな街でも美術館があるのに、苫小牧にないのはおかしい。遠藤ミマンをはじめ、苫小牧の作家たちの作品を散逸させてはならない」という考えのもと活動を支援した。一方、小野慶郎も自費出版した『真実の探求 下巻』(平成12年7月発行)のなかで、「幸い『明日の美術館を夢見る会』が発足し、どれだけの作品が、市内にあるのかを公開する企画展「遠藤ミマンと全道展の仲間たち」⁽¹⁶⁾も開催され好評を博していたし、ますます「苫小牧にも美術館を」の切望を強くして、その実現を期待するものである。とくに、苫小牧市には、87歳で健在の遠藤ミマン先生がおり、今なお



図13. 遠藤ミマン(1913-2004)

優れた作品を創造すると共に、後進の育成にも情熱を燃やし、全道美術界のリーダーとして活躍されている。市や道の文化賞を受賞。さらに一昨年(1998)年には、文部大臣の表彰(地域文化功労者)を受けるほどの得難い人物に報いるためにも、それに続く多くの郷土作家のためにも、ぜひ「苫小牧にも美術館の早期実現」を乞い願ってやまない次第である。」と記している。

現在の苫小牧市美術博物館は博物館・埋蔵文化財調査センターの施設を増改築することで平成25(2013)年7月27日に開館した。開館年の9月には「遠藤ミマン生誕100年記念展 勇払原野を愛して」を開催し、その画業と美術館への夢と情熱を紹介した。また、開館に先立つ7月6日には「苫小牧に美術館を実現する会」の寄贈による藤沢レオ作モニュメント「パサーージュ」の除幕式がエントランスホールにおいて行われた。多くの来賓が見守る中、市内で「NPO法人 樽前artyプラス」を主宰する作者の藤沢は挨拶の中で「遠藤ミマン先生が切り開いた道を進んでいきたい」と語った。

苫小牧市美術博物館が開館するまでには、苫小牧の地で戦前から美術家として教育者として活動を続けた遠藤ミマンやその半生を図書館、博物館施設の設置、文化財整備に捧げた小野慶郎、その後継者となった佐藤一夫をはじめ数多くの先人の力があつたことを忘れてはならないと感じる。

6. 現在そしてこれから

美術博物館としてリニューアルオープンしてから10年以上の歳月が経過し、職員が博物館の移転開館の事業を支えた職員から若い世代へと世代交代が進んでいる。この間、博物と美術の複合施設の特徴を生かした特別展や企画展、イベントが実施されたことで、幅広い分野、年齢、ニーズに対応でき、入館者数を大幅に増加させることができた。特別展・企画展はこれまでの活動にこだわらない柔軟な発想のもとにチャレンジした内容や新たな資料の掘り起こし、地道な調査研究の積み重ねを反映させた企画など、様々な試みが行われ結果に結びついている。これは担当学芸員が弛まぬ努力を重ねてきた結果に他ならないが、コロナ禍における苦難の時期を乗り越え、市民にとって欠くことのできない施設であることを職員全体が共通認識を持ち、そして何よりも地域の人々の支えがあつてこそ可能であつた。一方、教育普及事業もアウトリーチや共催事業、学校連携事業が増え、外部機関との連携やネットワークが強化されている。従来 of 行事に加え、館の美術館活動における基本理念のひとつである「子どもの感性を育む美術館」の実現に向けて、NPO法人樽前artyプラスと連携し10年以上継続して取り組んでいる「子ども広報部びとこま」。市内小中学校へ美術の出前授業を通じて対話による鑑賞活動やアーティストによるワークショッププログラムを実施する「みゅーじあむinスクール」。学芸員が講師を務め、教育関係者を対象に館の活用方法などを知っていただく「教員のための博物館の日」。学芸員の専門性を生かしつつ地域の素材を題材として親しみやすさを取り入れる工夫を重ねている「古文書解読講座初級編・中級編」などが新規に実施され、いずれも高い人気と評価を得ている。

最後に、美術博物館開館後に導入したボランティア登録制度について触れる。制度は美術や博物事業に関する見識や熱意のある方々の協力を得て、市民と協働



図14. 「遠藤ミマン生誕100年記念展 勇払原野を愛して」
平成25(2013)年



図15. みゅーじあむinスクール

した美術博物館を組織的に推進するために「遠藤ミマン生誕100年記念展 勇払原野を愛して」の監視ボランティアから始まった。これまでに展示会の監視の他、広報印刷物の発送、ワークショップ補助、展示準備補助などの活動が登録いただいた方々の協力を得て行われてきた。活動は職員による研修や他館への視察研修などの懇親を交えながら今日まで継続して行われている。これは地域に開かれた施設を目指し、市民参加を促した成果であり、なによりボランティア登録者が館活動を一緒に支えているという意識を持っていただいていることが重要だと思う。そして、活動が地域の方々に支えられ、それがより多彩な活動につながっていくことを実感する。今後はボランティアの方々のみならず、学校や研究機関との新たな連携を図るなど、より多彩な生涯学習活動が美術博物館というフィールドで実現できる環境が求められよう。様々な連携を図りながら着実な成果を生み出すことにより、地域に貢献できる施設であり続けることを願っている。

謝辞

本論をまとめるにあたり、ご協力、ご助言を賜りました三村伸氏、大泉博嗣氏、二階堂啓也氏、福島修氏、藤沢レオ氏、富田歩美氏、広瀬恵実氏、大竹郁美氏、住友亜友氏、橋本幸代氏、宮下るな氏及び関係機関の皆様記して厚く感謝申し上げます。

註

- (1) 小野慶郎(1917－2003) 北海道空知郡歌志内村(現・歌志内市)出身。9歳の時に両親とともに苫小牧町に移住。私立北海中学校を経て、日本大学専門部宗教科、同大学通教部文学部史学科卒業。昭和11(1936)年に苫小牧町役場に就職、復員後に再就職し、苫小牧市教育課社会教育係長、同市委員会教務課長、市立苫小牧図書館長などを歴任。昭和26(1951)年の市立苫小牧図書館、昭和45(1970)年の苫小牧市青少年センターの開館に尽力した。また、昭和30(1955)年の苫小牧市文化財保護条例の制定に際して中心的な役割を果たすとともに文化財の整備と指定を進めた。晩年は文化団体連合会事務局長や苫小牧郷土文化研究会副会長、顧問などを務めた。苫小牧市文化賞、北海道博物館協会賞、北海道文化財保護功労賞など受賞多数。
- (2) 小野慶郎は除隊後に苫小牧町役場を退職し、日本大学法文学科専門部宗教科に進学するが在学中に2度目の召集を受け終戦を迎えた。復員後、再就職の誘いをしたのが元上司で後の苫小牧市長の大泉源郎(1910－2005)であった。大泉源郎は明治43(1910)年、苫小牧村に生まれ室蘭商業学校に進学、中退後北海中学校に編入し卒業。昭和7(1932)年に苫小牧町役場に就職。以来半世紀以上にわたり地方自治一筋に活躍し、町・市助役を16年間、市長を5期20年間務め、苫小牧の発展に多大な貢献をした。昭和63(1988)年に7人目の苫小牧市名誉市民となり、自らが構想した出光カルチャーパーク(市民文化公園)内、苫小牧市美術博物館隣接地に胸像が建立されている。
- (3) 昭和28(1953)年8月13日から23日まで、「開基80周年、市制5周年記念 寒地向住宅博覧会」が苫小牧市西町(現・苫小牧市大成町1丁目)で開催された。これは当時最先端とされたブロック住宅を紹介する苫小牧市初の博覧会と銘打ったイベントで、会場には市内外から多くの見学者が訪れた。博覧会で小野慶郎は郷土館の展示を担当し遺跡分布地図のジオラマ、発掘出土品、写真や拓本、絵図などの展示を担当した。
- (4) 門脇松次郎(1904－1992)鳥取県東伯郡倉吉町(現・倉吉市)出身。一家で勇払郡安平村(現・安平町)へ移住し、苫小牧村へ転居後、家業の呉服太物商に従事。大正10年(1921)年5月の「コイノボリ大火」による廃業に伴い、文房具店や運動具類を扱う商店を立ち上げる。終戦後、新北海道新聞社の初代苫小牧支局長などを務める一方で、市教育委員長や消防団長など公職を歴任。

- 郷土苫小牧の経済、教育、文化、スポーツなど各界各方面で活躍し、昭和35(1960)年の苫小牧郷土文化研究会設立に際して、郷土の研究に理解があり、対外的にも通る文化人が望ましいという理由から初代会長(後に名誉会長)に選出された。昭和56(1981)年、苫小牧市博物館建設準備委員長就任。昭和58(1983)年、北海道社会貢献賞受賞。
- (5) 日本博物館協会(編) 1958 『博物館研究 31巻3号』 日本博物館協会
- (6) 亀谷 隆 2006 『北海道博物館史料』 (社)北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会 4頁
- (7) 楠野四夫(1930－2008)札幌市出身。私立北海中学校卒業後、昭和25(1950)年に苫小牧市役所に就職。市立図書館勤務となる。昭和31(1956)年、図書館司書の資格を取得。小野慶郎の退職に伴い図書館長に就任。詩人浅野晃との交流を通じた文学資料の受領、移動図書館車の導入などの功績を残し、市教委社会教育部長や体育部長などを務める。苫小牧郷土文化研究会創立者の一人で、平成4(1992)年に2代苫小牧郷土文化研究会会長(後に名誉会長)に選出。平成17(2005)年苫小牧市文化賞受賞。
- (8) 堀江敏夫(1936－2020)苫小牧町(現・苫小牧市)出身。北海道苫小牧東高校を経て、慶応義塾大学文学部卒業。昭和35(1960)年に苫小牧市役所に就職。昭和55(1980)年から3年間、同62(1987)年から平成9(1997)まで11年間の2度に渡り図書館長を務め、昭和63(1988)年の苫小牧市立中央図書館の開館と施設整備に尽力。昭和45(1970)年からは苫小牧市史の編集長を務め『苫小牧市史上・下巻』を刊行。平成9(1997)年には市史編集準備室長に就任し「苫小牧市史追補編」を完成させた。同年、文部省社会教育功労者賞表彰。『角川 日本地名大辞典 北海道』(共著)など著書多数。
- (9) 佐藤一夫(1940－2023)函館市出身。北海道函館東高校を経て明治大学文学部史学地理学科考古学専攻科卒業。昭和41(1966)年、苫小牧市教育委員会に就職。市立苫小牧図書館郷土博物室、苫小牧市青少年センターで学芸員を務める。昭和41(1966)年の北海道指定有形文化財「アイヌ丸木舟および推進具」の発掘調査を皮切りとして市内遺跡の発掘調査に従事。昭和40年代後半からは苫東開発に伴う発掘調査の指揮を執り、国指定史跡「静川遺跡」の調査を担当した。昭和60(1985)年の苫小牧市博物館・埋蔵文化財調査センターの開館において中心的な役割を果たし、平成2(1990)年に苫小牧市博物館館長、埋蔵文化財調査センター所長に就任。令和4(2022)年度北海道博物館協会表彰。
- (10) 小野は退職時のことを「ただ、私が心に映じた総合博物館は、もっと雄大でスケールの大きな理想像でした。場所も現在の旭町の官庁街でなく、緑ヶ丘公園の周辺一帯を含む丘陵地帯でした。動物園、水族館、植物園も併設した一大総合博物館でした。…私程度の未熟者では、こんな大きな夢の実現は適しませんし、提案しても一笑にふされ相手にされませんが、すべて半端で不完全ながら公民館、図書館、博物館(室)の初期段階での基礎造りに役立ったと満足すべきでした。“そして私の使命は終わったのだ。これからの図書館と博物館は、若い情熱と実力十分の後進たちに、万事を託し未練執着もなく、静かに去って行こう”とそう決心しました。『真実の探求 上巻』154－158頁と振り返っている。
- (11) 紀藤義一(1926－1997)穂別町(現・むかわ町穂別)出身。昭和25(1950)年から苫小牧市立勇払小学校の教員を務め、昭和29(1954)年に苫小牧市職員に転職。苫小牧郷土文化研究会の創立時から動物部会長としてウトナイ湖とその周辺に飛来する野鳥の生息状況を調査し、開発が進む苫小牧東部地域の自然保護を30年に渡り訴え続けた。平成2(1990)年には「ウトナイ湖湿原のラムサール条約指定決議に関する陳情」を市議会に提出し可決された。「アオサギコロニー調査報告 昭和53(1978)年 苫小牧郷土文化研究会」などの著作がある。日本野鳥の会苫小牧支部長、市立苫小牧図書館長、苫小牧市公民館長などを務めた。

- (12) 中居正雄(1929－2004)神奈川県横須賀市出身。昭和23(1948)年、北海道大学付属教員養成所生物学科卒業。苫小牧市立苫小牧東中学校教諭、北海道苫小牧東高校教諭、北海道恵庭高校教諭を務め、昭和62(1987)年、北海道苫小牧東高校を最後に退職。苫小牧自然環境保全審議会副会長、苫小牧郷土文化研究会理事などを務め、平成14(2002)年に同研究会3代会長。勇払原野の植物研究をライフワークにし、著書に「苫小牧地方植物誌」平成6(1994)年 苫小牧郷土文化研究会、『とまこまいの植物』平成12(2000)年 苫小牧民報社などがある。
- (13) 博物館大学講座は開講した昭和61(1986)年度から翌62年度までは年12回、昭和63年度からは原則として年9回実施している。
- (14) 企業と連携した特別展や企画展は苫小牧市博物館時代には10回、美術博物館となつてから4回開催されている。

その内訳は、苫小牧市市制40周年・苫小牧港開港25周年記念・出光興産北海道製油所操業15周年記念 第12回特別展「陶磁の東西交流展」(昭和63年9月26日～10月10日)、王子製紙(株)苫小牧工場操業80周年記念・苫小牧市博物館開館5周年記念 第18回特別展「紙の文化史展～パピルスから情報誌まで～」(平成2年8月26日～9月23日)、第42回特別展「出光美術館所蔵 ジョルジュ・ルオー展」(平成10年7月18日～8月30日)、苫小牧市民文化芸術振興条例制定記念・トヨタ自動車北海道(株)創業10周年記念事業「印象派とその歩み～感じたままに 瞬間を描く～」(平成14年8月24日～9月6日)、苫小牧市民文化芸術振興助成事業 トヨタ自動車北海道(株)所蔵美術展「東京藝術大学に集まった画家たち展～日本画の新たな息吹～」(平成16年4月24日～5月16日)、出光美術館所蔵「中国・磁州窯～なごみと味わい～」(平成18年9月30日～11月5日)、トヨタ自動車北海道(株)創業15周年記念「エコール・ド・パリ パリを愛した画家たち展」(平成19年10月13日～11月4日)、市制60周年記念 第52回特別展「出光美術館所蔵 板谷波山展」(平成20年9月27日～11月3日)、苫小牧市博物館25周年 王子製紙(株)苫小牧工場操業100周年記念特別展「紙をつくる 紙でつくる」(平成22年8月7日～9月26日)、トヨタ自動車北海道株式会社創業20周年記念事業 特別展「光から夢をたどって～印象派からエコール・ド・パリまで～」(平成24年7月14日～8月19日)、特別展「出光美術館所蔵 日本陶磁名品選－江戸時代前期の多彩な装飾世界－」(平成25年7月27日～8月25日)、特別展 トヨタ自動車北海道(株)創業25周年記念事業「水から未来を紡いで 20世紀美術の創造」(平成29年7月27日～8月27日)、特別展 トヨタ自動車北海道(株)創業30周年記念事業「芸術の都ウィーンとデザインの潮流」(令和4年7月16日～8月28日)、特別展 出光興産(株)北海道製油所操業50周年記念 苫小牧市美術博物館開館10周年「出光美術館近代美術名品選－四季が彩る美の世界」(令和5年9月23日～11月19日)。

- (15) 姉妹都市交流による特別展、企画展などは博物館時代に7回、美術博物館となつてからは1回開催されている。その内訳は、第5回特別展「姉妹都市の横顔」(昭和61年11月2日～11月30日)、第21回特別展「八王子千人同心展」(平成3年7月21日～8月18日)、第25回特別展「マオリ文化展」(平成5年2月28日～3月28日)、特別企画「ネーピアの歴史写真展」(平成5年8月1日～8月17日)、特別企画「秦始皇帝兵馬俑と秦皇島港展」(平成7年8月3日～8月20日)、第43回特別展「日光東照宮宝物展～姉妹都市日光の横顔～」、第44回特別展「八王子千人同心と幕末の勇武津」(平成12年8月5日～9月3日)、企画展「八王子千人同心と蝦夷地」(令和2年10月10日～12月13日)

また、博物館、美術博物館の所蔵資料を姉妹都市で紹介した展示会は、ネーピア市ホークスベイ博物館において開催した苫小牧市博物館開館10周年記念「二つの島のかげはし～苫小牧市博物館所蔵品展」(平成8年3月26日～4月28日)。MTGホークスベイにおいて開催した苫小牧

市・ネーピア市姉妹都市締結35周年記念「TREASURES OF TOMAKOMAI」展(平成27年11月14日～28日)の2回。この他、八王子市の桑都日本遺産センター八王子博物館において、令和5年7月22日～10月1日まで企画展「八王子と苫小牧～千人同心がつないだ絆～」、同博物館において、令和6年11月16日～令和7年1月13日まで姉妹都市盟約50周年記念事業「八王子の姉妹都市～千人同心がつないだ三都物語～」を開催している。

- (16) 郷土画家の特別絵画展「遠藤ミマンと全道展の仲間たち」は苫小牧市博物館所蔵と作家蔵併せて30点により、平成11(1999)年11月2日～14日まで苫小牧市文化交流センターで開催。11月7日には美術評論家吉田豪介(1935－2024)による「美術館建設の夢と現実」と題した講演会が同センター講習室で行われた。「遠藤ミマン生誕100年記念展 勇払原野を愛して」会期中の平成25(2013)年9月16日にも吉田豪介を講師に迎え「遠藤ミマンと全道展の仲間たち」と題する講演会が苫小牧市美術博物館研修室で開催された。

引用・参考文献

- 「太田実先生退官記念事業会」実行委員会(編) 1989 『太田実建築作品集』「太田実先生退官記念事業会」実行委員会
- 小野慶郎 1967 「苫小牧市勇払川埋没丸木舟発掘記」小野慶郎 『北海道の文化 第11号』 北海道文化財保護協会
- おのよしお 1983 『文化財裏ばなし上巻～苫小牧市指定文化財秘録～』 苫小牧郷土文化研究会まめほん編集部
- おのよしお 1984 『文化財裏ばなし下巻～苫小牧市指定文化財秘録～』 苫小牧郷土文化研究会まめほん編集部
- 小野慶郎(編) 1961 『市立苫小牧図書館 10年のあゆみー創立10周年記念ー』 市立苫小牧図書館
- 小野慶郎 1987 「博物館は歴史創造の拠点たれ」『苫小牧市博物館だより第8号』
- 小野慶郎 2000 『真実の探求 上巻』真実の探求奉仕社 自家版
- 小野慶郎 2000 『真実の探求 下巻』真実の探求奉仕社 自家版
- 門脇松次郎 1978 「総合郷土博物館の早期建設について」『郷土の研究 第4号』 苫小牧郷土文化研究会
- 亀谷 隆 2006 『北海道博物館史料』(社)北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会
- 亀谷 隆 2011 『北海道・博物館と人 博物館を支えた二十人の生涯』 NPO法人 公共環境研究機構
- 亀谷 隆 2016 『北海道博物館史料・続』 サッポロ堂書店
- 楠野四夫 1971 「苫小牧郷土文化研究会の歩み」『郷土の研究 第3号』 苫小牧郷土文化研究会
- 楠野四夫 1991 「博物館建設を演出した人」『苫小牧市博物館だより第19号』
- 佐藤一夫 1967 「アイヌの丸木舟」『郷土の研究 第2号』 苫小牧郷土文化研究会
- 佐藤一夫 1986 「博物館建設運動と郷文研」『郷土の研究 第5号』 苫小牧郷土文化研究会
- 市立苫小牧図書館(編) 1982 『図書館30年史』 市立苫小牧図書館
- 苫小牧郷土文化研究会 1986 「座談会 苫小牧郷土文化研究会の25年を語る 門脇松次郎・扇谷昌康・小野慶郎・楠野四夫・司会 佐藤一夫」『郷土の研究 第5号』 苫小牧郷土文化研究会
- 苫小牧郷土文化研究会 1990 『郷土文化を拓くー設立30周年記念誌ー』 苫小牧郷土文化研究会

会

- 苫小牧郷土文化研究会(編) 2001 『記録集創刊号 先人が語る苫小牧』 苫小牧郷土文化研究会
苫小牧郷土文化研究会(編) 2004 『記録集第2号 先人が語る苫小牧』 苫小牧郷土文化研究会
苫小牧郷土文化研究会 2010 「苫郷文研50年の活動年譜」『郷土の研究 第9号 苫郷文研創立50周年記念号』 苫小牧郷土文化研究会
苫小牧郷土文化研究会 2010 「特別対談 亡き楠野名誉会長を偲んで 長女 山本美登里さん聞き手 宮夫靖夫副会長」『郷土の研究 第9号 苫郷文研創立50周年記念号』 苫小牧郷土文化研究会
苫小牧市 1953 『北海道寒地向住宅博覧会』
苫小牧市 1975 『苫小牧地区自然保護関係調査報告書 昭和49年度(総集編)』
苫小牧市 1976 『苫小牧市史 下巻』
苫小牧市教育委員会 1954 『北海道先住民族資料展覧会記録 附郷土資料目録(第二集)』
苫小牧市教育委員会 1965 『苫小牧市立郷土博物室 陳列資料・標本目録 第一集』
苫小牧市教育委員会・市立苫小牧図書館 1966 『苫小牧市沼の端丸木舟発掘調査概要報告書 昭和41年7月2日～10日』
苫小牧市青少年センター 1977 『事業概要 昭和51年度』
苫小牧市・(社)日本公園緑地協会 1982 『苫小牧市カルチャーパーク基本計画 概要説明書』
苫小牧市博物館 1986～2001 『苫小牧市博物館 年報 第1号～第17号』苫小牧市博物館
苫小牧市博物館・博物館郷土学習検討委員会 1989 『博物館における郷土学習について』
苫小牧市博物館 1990 『苫小牧市美術館建設基本構想案』
戸田 恭司 2017 「釧路市立博物館80年の歩み」『釧路市立博物館紀要 第37輯 博物館創立80周年記念号』 釧路市立博物館
宮夫靖夫 2010 「半世紀にわたる苫郷文研のあゆみ」『郷土の研究 第9号 苫郷文研創立50周年記念号』

関係年表

昭和26(1951)年4月1日	旧市立病院跡の建物(大正11年築門脇呉服店)を使用し、公共図書館として苫小牧市立図書館が正式に発足
昭和27(1952)年11月1日	苫小牧市教育委員会発足。森田勇教育長が兼任の図書館長となる
昭和27(1952)年～29(1954)年	市教委図書館費で首飾り・漆器などのアイヌ民族資料を購入
昭和28(1953)年10月21日	植苗美沢の平田遺跡を河野広道北海道学芸大学札幌校教授の指導により発掘調査。苫小牧初の発掘調査
昭和29(1954)年11月1日～3日	市教委、第1回全国文化財保護週間「北海道先住民族資料展」を苫小牧市公民館において開催
昭和30(1955)年8月19日	苫小牧市文化財保護条例を制定公布
昭和35(1960)年1月15日	市立苫小牧図書館の専任館長(2代館長)として小野慶郎司書が就任。同年、学芸員資格取得
昭和35(1960)年4月23日	市立苫小牧図書館博物室において「苫小牧郷土文化研究会」(初代会長門脇松次郎)の設立総会が開催
昭和35(1960)年6月1日	郷土博物室を市立苫小牧図書館内に開設
昭和36(1961)年6月1日	北海道博物館協会発足 初代会長 市立函館博物館館長武内収太、小野慶郎が理事に就任
昭和36(1961)年11月4日～6日	市立苫小牧図書館創立10周年記念行事として郷土博物室において「郷土資料展」開催
昭和37(1962)年10月6日	苫小牧郷土文化研究会、陳情書「市立博物館及び動物園の設置について」を市長、市議会、市教委に提出
昭和40(1965)年3月10日	市立苫小牧図書館、「苫小牧市郷土博物室 陳列資料・標本目録 第一集」を発行
昭和41(1966)年7月2日～10日	苫小牧市教育委員会、勇弘川からアイヌの丸木舟5艘及び推進具を発掘 発掘担当者大場利夫北海道大学教授(道文化財専門委員)
昭和42(1967)年3月17日	樽前山溶岩円頂丘、天然記念物として北海道指定文化財に指定 開拓使三角測量勇弘基点、北海道指定史跡に指定
昭和42(1967)年6月22日	アイヌ丸木舟および推進具、北海道指定有形文化財に指定
昭和44(1969)年11月15日	苫小牧市青少年センターの完成により、市立図書館郷土博物室所蔵の博物資料を同センターへ移管
昭和45(1970)年1月15日	開道100年記念・百年記念補助事業として、博物展示と科学展示を併設する苫小牧市青少年センター開館
昭和45(1970)年11月1日～30日	苫小牧市青少年センター1階博物展示室において「アイヌ民族資料展」開催
昭和47(1972)年2月	苫小牧郷土文化研究会、翌年の開基百年を目指し博物館建設の要望書を市に提出
昭和47(1972)年6月29日～30日	第11回北海道博物館大会、苫小牧市青少年センターを会場に開催
昭和48(1973)年7月	苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査班が3名体制で発足
昭和48(1973)年8月3日	苫小牧市青少年センターにおいて苫小牧開基百年記念「とまこまい百年展」開催
昭和48(1973)年11月	苫小牧開基百年を記念して郷土博物館建設方針決定
昭和50(1975)年5月17日～25日	「苫小牧市史上巻」発行を記念し特別展「苫小牧市史展」を苫小牧市青少年センターにおいて開催
昭和55(1980)年7月23日	「苫小牧市博物館建設懇話会」設置 (会長門脇松次郎 委員18名)
昭和56(1981)2月17日～18日	苫小牧市青少年センターにおいて第4回北海道博物館協会学芸職員部会開催
昭和56(1981)年11月4日	「苫小牧市博物館基本構想(案)」がまとまる

昭和57(1982)年1月	第1回苫小牧市博物館建設準備委員会、博物館基本構想において埋蔵文化財センターを併設することを審議
昭和58年(1983)年9月20日	苫小牧市議会第14回定例会において博物館・埋蔵文化財調査センター建設事業費の予算が議決
昭和60(1985)年4月1日	苫小牧市内の遺跡の調査・研究を目的とする苫小牧市埋蔵文化財調査センター開所
昭和60(1985)年11月3日	カルチャーパーク構想の中心施設として苫小牧市博物館が開館。11月1日に落成式典を苫小牧市文化会館において開催
昭和61(1986)年7月12日	博物館大学講座開講 第1講「文化財について」講師 苫小牧郷土文化研究会常任理事 小野慶郎
昭和61(1986)年11月2日～30日	苫小牧市博物館開館1周年記念特別展「姉妹都市の横顔」開催
昭和62(1987)年1月8日	静川16遺跡「静川遺跡」として国指定史跡に指定
昭和62(1987)年11月19日	苫小牧市博物館、埋蔵文化財調査センターが昭和62年度建築業協会賞受賞
昭和63(1988)年7月31日	苫小牧市博物館友の会発足
昭和63(1988)年9月26日～10月10日	苫小牧市市制40周年・苫小牧港開港25周年記念・出光興産(株)北海道製油所操業15周年記念特別展「陶磁の東西交流展」開催
平成元(1989)年8月24日	市内小学校3年生を対象とした社会科授業「博物館郷土学習」の研究授業を実施
平成2(1990)年8月26日～9月23日	王子製紙(株)苫小牧工場操業80周年記念・苫小牧市博物館開館5周年記念「紙の文化史展～パピルスから情報紙まで～」開催
平成2(1990)年11月	遠藤ミマン苫小牧美術協会会長、自らが所蔵する美術作品128点を博物館へ寄贈。
平成3(1991)年7月23日～24日	第30回北海道博物館大会、苫小牧市文化会館・苫小牧市博物館を会場に開催
平成10(1998)年7月18日～8月30日	とまこまい市制50周年記念・苫小牧商工会議所創立50周年・出光興産(株)北海道製油所創業25周年記念「出光美術館所蔵品ジョルジュ・ルオー展」開催
平成13(2001)年4月1日	苫小牧市制施行50周年、八王子千人同心移住200年を記念して勇武津資料館が開館
平成14(2002)年8月24日～9月16日	苫小牧市民文化芸術振興条例制定記念事業・トヨタ自動車北海道10周年記念事業「印象派とその歩み展～感じたままに瞬間を描く～」開催
平成22(2010)年8月7日～9月26日	王子製紙(株)苫小牧工場操業100周年記念・苫小牧市博物館開館25周年記念特別展「紙をつくる 紙でつくる」開催
平成24(2012)年1月	苫小牧市美術館基本計画策定
平成25(2013)年7月27日	苫小牧市博物館を苫小牧市美術博物館と改称 開館記念特別展「出光美術館 日本陶磁名品選～江戸時代の多彩な装飾世界～」開催

谷内六郎（1921-1981）と苦小牧 - 壁画《芽の出る音》（1972年）をめぐって

立石 絵梨子¹

1. はじめに

苦小牧には、画家・谷内六郎（1921-1981）が原画を手掛けた壁画《芽の出る音》がある。本作は、泰然とした樽前山を背景に子どもたちが遊び、木々や浜辺が楽器の姿を交えて描かれている。風や波の音が音楽となって聞こえてくるようなこの作品は、ガラス製のモザイクタイルで制作されている。1972年に苦小牧市科学センターの開館を記念し、建物に設置された壁画《芽の出る音》は、縦5m、横14mの大ききで、谷内六郎が原画を手掛けた壁画として、東京以北に現存する最も大きなものである。

設置されてから2022年で50年を迎えたこの壁画は、現在建物の老朽化とモザイクタイルの劣化と損傷、苦小牧市科学センターのリニューアル検討といった問題の渦中にある。壁画の保存状況については、全体に物理的な損傷が激しく、部分的に大幅なタイルの剥落、剥離が見られ、それらの損傷は進行している状態である。タイルの損傷の主な要因は、壁面とタイルの間に溜まった雨水の冬期間の凍結が長年繰り返されてきたこととされている。1991年に専門業者によって、タイルの剥離箇所の一部に特殊樹脂で防水加工が施工されたが、以降は施設職員が部分的にコーキングを行うなどの対応をするに留まり、損傷の進行は抑えられていない。このような状況については、市議会や新聞紙面等で長年議論されており、地域住民の関心が寄せられてきた。

苦小牧市美術博物館では、2022年に壁画設置50年を記念し、2022年9月17日から11月6日に開催した特別展「壁画《芽の出る音》設置50年記念 谷内六郎展」を開催した。同展では、これまでの議論では照射されてこなかった壁画の作品内容に焦点を当て、他の谷内六郎作品との比較により、壁画《芽の出る音》の表現上の特質や壁画が果たしてきた文化的な意義についての検証を試みた。

本稿では、2022年に当館が開催した展覧会によってまとめたこと、そして本展開催を機に寄せられた新たな資料や情報について報告する。

2. 北国の自然が奏でる〈音〉

2-1. 交響曲としての《芽の出る音》

壁画《芽の出る音》は、谷内六郎が苦小牧のために描いた原画をもとに、近代モザイク社が制作し、当時の苦小牧経済界の重鎮であった中村重信氏により寄贈されたものである⁽¹⁾。原画を谷内六郎に依頼した経緯については、開館から間もない1972年に苦小牧市青少年センター（1985年苦小牧市科学センターと改称）に勤務していた同施設職員（故人）が谷内に手紙を書いたことがきっかけであった。所縁のない土地からの突然の申し出であったはずだが、地域の子どものためになることが願われたものであることに理解を示し、谷内はこの依頼を受けたのだと推測される。

¹ 苦小牧市美術博物館 主任学芸員



図1 壁画《芽の出る音》(苫小牧市科学センター 2022年8月撮影)



図2 原画《芽の出る音》
(1972年、墨、水彩・紙、106.0×297.0cm、知内町中央公民館)
©Michiko Taniuchi

まず、模造紙をつなぎ合わせて制作された原画と壁画を比較すると、全体の構成から子どもたちの表情などの細部に至るまで、原画から壁画への再現性は非常に高いことがわかる。壁画では、空や大地、海の部分が、ガラススタイルならではの煌めきとモザイクタイルの個々の色彩のニュアンスによって、原画にはない立体感や表情が作り出されている。特にタイルの質感の印象を際立たせる雪に覆われた大地が画面の大部分を占めるような構成からは、谷内がモザイク壁画としての完成を明確にイメージし、画面を構想したものであったことが推測される。

次に、描かれた個々のモチーフに着目すると、まず画面中央右側には輪になって踊る子どもたちが描かれ、左側には輪に駆け寄り二人の子どもの姿を見ることができるところどころに雪どけがはじまっているが、大地はまだ雪に覆われ、空を突き刺すような針葉樹と枯木には寒さの残る表現が見られる。個々のモチーフを画面全体に点在させることで、視線を大きく動かしながら鑑賞させるという企図がみてとれる。また、遠景に大きく裾野を広げた山は、その特徴的な山頂の形から、その山が樽前山であり、本作が苫小牧の早春風景であることが示されている。

本作には〈音〉を想起するモチーフが印象的に取り入れられている点に見どころがある。木々にはチェロやコントラバスの姿があり、冷たい風の音が弦楽器の音色となって聞こえてくるようだ。雪面に目を向けると、新しい芽があちらこちらではじけている。新芽は、雪どけの合図を鳴らし、砂浜の鍵盤に打ち寄せる波もまた春の訪れを奏でるようである。

季節の訪れを奏でる楽器たちは、「まるで楽器のように」ではなく、「まさしく楽器」として描かれている点が特徴的だ。絵の中の景色は現実にはありえない光景だが、描かれた楽器は、風景の中に調和しているように感じられる。この点について、橋本治(2001)は、谷内六郎の作品には「現実」と「幻想」の境目がないとしながら、作品が「自然な発想が自然のまま絵になっているから、「そういうもんだ」と思うしかないのである」と評している。また、谷内(1963)自身は、作品の着想が子ども時代の記憶や感覚にあるとし、「人はだれでも小さい時、(中略)自分だけしか解らない

宝石のような大切な感覚をあじわう時がきつと一度や二度はあると思うのです。（中略）みんなそういう体験感覚を一生もっていて、時々思い出していると思うのです」と述べている。「まさしく楽器」として描かれた風景は、瑞々しい感覚で世界と関わる子ども時代の記憶を呼び覚まし、観る人にどこかなつかしく共感されるのであろう。

谷内の代表作に、『週刊新潮』の表紙絵がある。1965年の創刊から、谷内が亡くなる1981年までの25年間に描き続けた表紙原画は、1,335枚に上る。それらは、子ども時代に暮らしの中で感じた感覚的な錯覚が、温かなタッチで具現化されており、＜音＞にまつわる表現も多い。例えば、『夜明けの音階』（1964年、横須賀美術館蔵）では、汽笛はラッパに、牛乳屋が家々を回る様子は鉄琴の姿として描かれている。季節の変化に対する感覚も、様々な楽器の音色になって表現されている。《雨だれの春の序曲》（1968年、横須賀美術館）では、屋根の雪が溶けた雨だれが、打楽器の音色となり、『冬の曲』（1967年、横須賀美術館蔵）では、北風に揺れる遠くの電線が弦楽器の弦となり、吹きこむ北風が、激しい音色になって聞こえてくるような作品だ。《貝の夢》（1961年、横須賀美術館蔵）では、月夜の海で、海の鍵盤と浜辺の弦楽器や金管楽器がオーケストラを奏でており、その曲調には幻想的なイメージが想起される。打ち寄せる波が鍵盤を奏でるイメージは、『芽の出る音』にも印象的に取り入れられているが、これは『週刊新潮』の表紙絵に先立つ『波のピアノ』（1951年、個人蔵）にも表れており、谷内が好んだ表現であることがわかる。

作品に表れる＜音＞をイメージする表現に関して、壁画に隣接する石碑には、谷内自身によって次の言葉が刻まれている。

遠い 遠い北の国で芽が出る夢

それは あの けたゝましい 力強い雪溶けのシンホニーです。

ぼくは そんな春の来る音や 芽の出る音を 少年の日からもちつづけてまいりました。

そして今日 北海道の美しい大自然にかこまれた苫小牧市に そうしたぼくの夢が現実に壁画となって完成させられたことは ぼくにとって最大の光栄であります。

春先の芽を吹く夢は 又 子供たちの未来の希望 明るい未来を意味するものであります。

苫小牧の皆様 北海道の皆様に深く感謝しつゝ たゞ感動で言葉も御座いません

一九七二年

六月二十五日 谷内六郎



図3 石碑（苫小牧市科学センター 2022年8月撮影）



図4 1972年の建設中の様子（写真提供：苫小牧市科学センター）

以上の言葉からは、《芽の出る音》で表れる冷たい風の音、波の音、大地を割る芽吹きのかき音が、力強い喜びの交響曲として描かれていることが説き明かされる。さらに、「けたましい」交響曲が響き渡る舞台として、谷内が北海道の空と大地を想定していたとするならば、本作に対する制作依頼が屋外の壁画であったからこそ、＜音＞を主題にした作品を構想したといえるのではないか。

2-2. 北海道に寄せるイメージ

谷内六郎は北海道を訪れる前、著書『旅の絵本』（1980）の中で、北海道に対するイメージを次のように語っている。

原始林の北海道の空はチャイコフスキーの悲愴の音が鉛色の広い空間にひびき、空間をささえる針葉樹の林が知性的な構成で立つのは北海道というところは内地的なしめっぽさがないためです。

鉛色の雲を割ってセルリアンブルーの線が引かれ、やがてこのセルリアンブルーから春の芽生えがあるのです。芽生えは凍てつく雪を割ってすさまじいエネルギーの音をたてている自然の楽譜かもしれない…。

このように、自然が奏でる音のイメージは、谷内にとってとりわけ北海道の自然と結びつく象徴的なものであったといえる。同時に、壁画に現れる天を衝くような針葉樹も北海道の自然を象徴的に表すものであったのだろう。谷内が心の中に広がる北国を空想し、そのイメージを作品化したものは『週刊新潮』の表紙絵の中にも描かれており、中でも北国の冬の光景には、針葉樹の姿がしばしば登場する。つまり、《芽の出る音》は、これまでの谷内の作品で表現してきた冬から春にかけての風景を再構成するものであり、特に本作の主題となった＜音＞のイメージは、彼の考える北海道を強く象徴するものであったといえるだろう。

谷内は、壁画が設置された1972年の秋に長男を伴い初めて北海道を訪れることとなった。この時、苫小牧のほか、支笏湖、登別、オロフレ峠、洞爺湖をみて回った。旅の思いについて、「子供の頃から夢見て来た遠い北国に、ぼくの壁画ができて、それをまだ夢見がちな幼子と二人旅で見に来るとは、考えてもみない出来事でありました（谷内1972）」と語り、現地で感じられた＜音＞の印象を取り入れながら、次のように記述している。

ピオロン　オロフレ
オロフレ峠
ピオロン　オロフレ
オロフレ峠に鳴る風は
遠いメノコの吹く笛か

車の外は牛乳をまいたようにビッシリ白い霧で、道もよく分かりません。(中略)子供はそんな霧の中がかえっておもしろらしく、キャッキヤとはしゃぎ、夕方のようになっているあたりに子供の声だけが変に小坊主的にひびいて、霧のかなたにある湖や山々の神秘さが深々と胸に感じるのです。



図5 1972年に長男と訪れた際のスナップ写真（画像提供：谷内達子氏）



図6 谷内六郎《霧深きオロフレ峠》
(1972年、墨、水彩・厚紙、18.5×25.5cm、個人蔵)
©Michiko Taniuchi

3. 壁画設置以後

3-1. 壁画完成除幕式

1972年6月25日、壁画の完成を記念した除幕式が行われた。除幕式は非常に華々しく行われ、その様子を記録したスナップ写真が苫小牧市科学センターに保管されている。当日は、市内の小中学生、バトントワリングやブラスバンドによるパレードが市内中心部を行進し、最終的に壁面前に集合し、再び演奏などが行われたあと、幕に覆われた壁画が披露された。式典には、当時の苫小牧市長をはじめ、谷内六郎の妻である谷内達子氏と娘の広美氏も参加し、その賑わいの様子は当時の写真からもみてとれる。



図7 1972年の建設中の様子（写真提供：苫小牧市科学センター）



図8 1972年の建設中の様子（写真提供：苫小牧市科学センター）

3-2. 「谷内六郎回顧展」(1993年8月4日～17日)の開催

1993年8月4日から17日まで、苫小牧駅前にあった旧サンプラザビルで「谷内六郎回顧展」が開催された。同展は、市内の企業や美術団体、文芸サークルなどで実行委員会を結成し、運営は市民が中心となって行われた。実行委員会の委員長を務めたのは、苫小牧の芸術家や文化人たちの間で中心的な役割を担っていた画家の遠藤ミマン(1923-2002)であった。

遠藤は、はじめに谷内六郎の回顧展の話聞いたとき、まず思い出されたのが「ぼたぼたの春」の絵だったとし、その作品の印象を次のように語っている(遠藤1993)。

その絵は、雑巾をならべたような絵であった。いろいろ違った雑巾の模様を、巧妙につないで絵にしていた。それまでこんな奇抜な絵を見たことがない。日常生活の中で使われる雑巾を絵にするとはすごい。(中略)

その上、この絵は勇払原野の早春の感じそっくりなのだ。北国の早春と言えば、前の年の枯れ残りと、今年の芽吹きとが入りまじる。それはまさに谷内さんの雑巾模様なのだ。

絵というのは普通楽しむために見るものだが、私は谷内さんの絵を見て、描いてみたいという意欲を強く受けた。

遠藤ミマンは、谷内六郎回顧展開幕前夜に、来苫していた谷内の妻である達子氏との会話で、この作品が「つぎだらけの春」というタイトルであったことを知ったという。会話を記録した遠藤ミマンによると、本作は戦後の疲弊した都市の復興の感じが表わされたものだったとされる。同展で本作は展示されなかったが、遠藤ミマンは記憶の中の作品の題名と作品の着想源を知ることができ、「大きな収穫」であったと述べている。このエピソードは、谷内の作品が、苫小牧との新た

な所縁を生んだことが示されるものである。また、谷内の作品が観る人の心の風景と共鳴する力をもつことを改めて窺い知るエピソードでもあろう。

4. おわりに

2022年に苦小牧市美術博物館で開催した「壁画《芽の出る音》設置50年記念　谷内六郎展」の準備をしている中で、苦小牧市内で谷内六郎の色紙を所有しているという複数の申し出があった。これらの色紙については、1972年の壁画完成除幕式の時に一部販売がなされた記録がみられる他、1972年に谷内六郎が苦小牧を訪問した際に、求めに応じて描いたものもあった⁽²⁾。寄せられた色紙は、2022年の展覧会時に紹介し、その一部は展覧会終了後に当館に寄贈された。現在まで大切にされてきた色紙の数々は、苦小牧の地で谷内六郎が人々の記憶に残り続けてきたことが示されるものである。

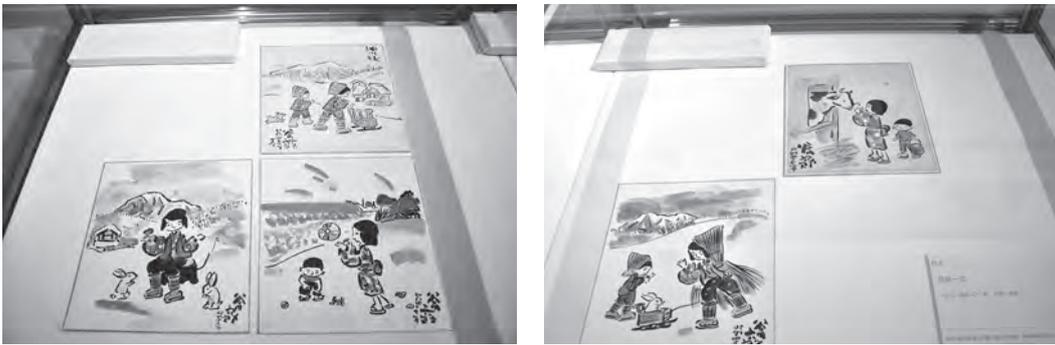


図9 展覧会場で展示した色紙

損傷が著しい壁画《芽の出る音》について、特に2010年以降苦小牧市議会においても継続的に存亡に関する議論がなされてきたが、2025年現在、壁画の将来的な見通しは定まっていない。現在、原画については知内町中央公民館に常設展示され、知内町の人々に親しまれている。原画については、制作から50年以上が経過しているものの、額装され、直射日光の当たらない場所に展示されているため、大きな損傷は見られない。一方の壁画は、建物にガラススタイルが貼り付けられているという構造上、取り外して修理することは容易ではない。



図10 知内町中央公民館に常設展示されている《芽の出る音》原画
(2022年撮影)

2022年の展覧会では、現状の壁画を記録に残すため、ドローンによる空撮を行い、記録映像として展示室で上映した。苦小牧市科学センター開館時に植樹された樹齢50年を超える木々が生い茂り、撮影には想定より時間を要したが、建物と周囲の環境も含めて記録をすることができた。また、壁画の正面の画像について、これまでは壁画が縦5m横14mと大きく、また壁画前方の木々によって撮影が困難であったが、ドローンを用いたことで、壁画を正面から捉えた画像を撮影で

きた。2022年の展覧会開催を通じて寄せられた資料や情報、新たに制作した壁画の記録映像については、今後の活用に期待をしたい。



図11 ドローンによる空撮の様子（2022年6月撮影）

謝辞

令和4年開催の特別展「壁画《芽の出る音》設置50年 谷内六郎展」開催及び本稿の執筆に際し、谷内達子氏、谷内広美氏より多大なご協力をいただきました。また、ご協力、ご助言を賜りました横須賀美術館、知内町教育委員会、しりうち童画の会、及び関係機関の皆様にご記して厚く感謝申し上げます。

註

- (1)1993年11月9日の苫小牧市議会一般会計決算審査特別委員会で、評価額345万円の壁画が1972年5月に中村重信氏から寄附採納の申し出がなされたと当時の社会教育部長が答弁している。代金は、原画作成代の謝礼も含めて近代モザイク社に支払われ、壁画の現物寄贈という形で処理されている。尚、本答弁では続けて制作後に原画が知内町で保管されてきた経緯についても明らかにしている。
- (2)谷内六郎は、広島県の「たけのこ学級」や静岡県「ねむの木学園」などの障がいをもつ子どもたちの施設の建設や教育などに収益が役立てられるポストカードへの原画の提供なども積極的に行っていた。また、全国各地で開催される個展の際には、寄付を目的とした色紙などの即売を行うことも多かったという。

引用文献

- 遠藤ミマン 1993 「とっておきのモチーフ・勇払原野」『苫小牧市博物館だより』 苫小牧市博物館 第25号
- 谷内六郎 1963 「表紙の言葉」（南風のうた）『週刊新潮』 新潮社 4月8日号
- 谷内六郎 1972 「オロフレ峠の霧の晩」『旅』 新潮社 46巻10号
- 谷内六郎 1980 「空想の北海道」『旅の絵本』 旺文社 pp.36-38
- 橋本治 2001 「シュールリアリスト谷内六郎」『芸術新潮』 新潮社 5月号 p.60

資料 特別展「壁画《芽の出る音》設置 50 年記念 谷内六郎展」出品作品一覧

凡例

1. 本リストには、次の項目を記載した。
出品番号、作品・資料名、制作年（西暦・和暦）技法・素材、サイズ縦×横（cm）、所蔵先
備考には、掲載雑誌や出版情報等を記した。
2. 制作者について、谷内六郎以外のものは備考欄に記した。
3. 印刷物（雑誌、書籍、ハガキ等）のための原画の制作年は、原則としてその印刷物が発行及び発表された年とした。

第一章 海辺の子どもたち

No.	作品・資料名	制作年（西暦・和暦）	技法・素材	サイズ縦×横（cm）	所蔵先	備考
1	上総の町は貨車の列 火の見の高さに海がある	1956（昭和31）年	水彩・紙	34.3×24.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1956（昭和31）年2月19日創刊号
2	海のサイダー	1957（昭和32）年	水彩・紙	26.6×18.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1957（昭和32）年9月9日号
3	朝	1959（昭和34）年	水彩・厚紙	38.5×26.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1959（昭和34）年12月21日号
4	雲の物語	1960（昭和35）年	水彩・厚紙	37.8×27.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1960（昭和35）年8月1日号
5	ひき潮の忘れもの	1963（昭和38）年	水彩・厚紙	39.0×27.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1963（昭和38）年8月19日号
6	波のケンゴム	1964（昭和39）年	水彩・厚紙	39.5×27.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1964（昭和39）年8月31日号
7	船が編むレース	1967（昭和42）年	水彩・レース・厚紙	39.0×28.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1967（昭和42）年4月15日号
8	霧のミルクも来てた	1970（昭和45）年	水彩・厚紙	40.7×29.3	横須賀美術館	『週刊新潮』1970（昭和45）年4月11日号
9	ぼく買ったって言はないよ	1971（昭和46）年	水彩・厚紙	40.6×29.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1971（昭和46）年3月20日号
10	ひらきの魚拓	1972（昭和47）年	水彩・厚紙	40.5×29.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1972（昭和47）年6月24日号
11	さゝ波はカスリ 沖はヨコジマを織る	1973（昭和48）年	水彩・厚紙	40.5×30.3	横須賀美術館	『週刊新潮』1973（昭和48）年3月8日号
12	船の山びこ	1973（昭和48）年	水彩・厚紙	41.7×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1973（昭和48）年6月21日号
13	貝のレーシングカー	1975（昭和50）年	水彩・厚紙	42.3×29.7	横須賀美術館	『週刊新潮』1975（昭和50）年7月10日号
14	雪と波との合戦	1979（昭和54）年	水彩・紙	40.5×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1979（昭和54）年2月1日号
15	『海の子 山の子』第1号、第2号	1975（昭和50）年	雑誌	24.0×21.0	苫小牧市美術博物館	谷内六郎 文・絵、代田昇 文、原田泰治 絵 『海の子 山の子』信州くるまいずの会
16	夜明の海辺	1950（昭和25）年	油彩・板	15.7×22.6	個人蔵	
17	海の上の月	1951（昭和26）年	水彩、墨、鉛筆・紙	27.2×39.5	個人蔵	
18	月の海辺	1951（昭和26）年	水彩、墨、鉛筆・紙	15.1×22.1	個人蔵	
19	ヨコハマ	1950（昭和25）年	油彩・板	15.7×22.7	個人蔵	

第二章 記憶のスケッチ

No.	作品・資料名	制作年（西暦・和暦）	技法・素材	サイズ縦×横（cm）	所蔵先	備考
20	青い曲	1956（昭和31）年	水彩、コラージュ・紙	29.5×20.7	横須賀美術館	『週刊新潮』1956（昭和31）年6月26日号
21	おじさんに似てるわよ	1959（昭和34）年	水彩、レース・紙	32.5×23.6	横須賀美術館	『週刊新潮』1959（昭和34）年4月27日号
22	夕焼を消す人	1959（昭和34）年	水彩、コラージュ・紙	32.5×25.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1959（昭和34）年5月4日号
23	夜のサイレン	1960（昭和35）年	水彩・厚紙	39.5×27.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1960（昭和35）年5月9日号
24	太鼓の音はおなかにひびく	1960（昭和35）年	水彩・厚紙	38.0×28.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1960（昭和35）年9月12日号
25	湯気の音	1961（昭和36）年	水彩・厚紙	37.5×26.1	横須賀美術館	『週刊新潮』1961（昭和36）年3月6日号
26	初雪は北風の赤ちゃん	1962（昭和37）年	水彩・厚紙	39.3×27.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1962（昭和37）年12月24日号
27	ミシンの音	1963（昭和38）年	水彩・厚紙	39.2×27.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1963（昭和38）年7月8日号
28	すりばちの音	1964（昭和39）年	水彩・厚紙	39.3×28.2	横須賀美術館	『週刊新潮』1964（昭和39）年3月23日号
29	逃げる方に来る煙	1965（昭和40）年	水彩・厚紙	39.2×27.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1965（昭和40）年11月20日号
30	みかん	1967（昭和42）年	水彩・厚紙	39.2×28.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1967（昭和42）年12月30日号
31	雪野のファスナー	1968（昭和43）年	水彩・厚紙	39.5×29.7	横須賀美術館	『週刊新潮』1968（昭和43）年1月20日号

32	吹雪のわたあめ屋	1968(昭和43)年	水彩・厚紙	39.3×28.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1968(昭和43)年2月10日号
33	天井の記憶	1968(昭和43)年	水彩・厚紙	39.0×28.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1968(昭和43)年4月13日号
34	こずえの音	1968(昭和43)年	水彩・厚紙	41.5×28.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1968(昭和43)年11月30日号
35	わけてあげたの	1969(昭和44)年	水彩・厚紙	41.0×29.4	横須賀美術館	『週刊新潮』1969(昭和44)年3月22日号
36	買ってもらった気持	1969(昭和44)年	水彩・厚紙	40.8×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1969(昭和44)年12月27日号
37	夜中の水音	1972(昭和47)年	水彩・厚紙	40.5×29.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1972(昭和47)年7月1日号
38	月夜の蚊帳	1974(昭和49)年	水彩・厚紙	42.3×29.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1974(昭和49)年8月29日号
39	色々な雨だれの音がきこえる	1977(昭和52)年	水彩・厚紙	40.5×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1977(昭和52)年3月31日号
40	瓦が波に見えた日	1979(昭和54)年	水彩・厚紙	40.3×30.2	横須賀美術館	『週刊新潮』1979(昭和54)年5月3日号
41	雪の宇宙人	1980(昭和55)年	水彩・紙	40.5×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1980(昭和55)年2月7日号
42	とまこまいの牧場にて	1972(昭和47)年	水彩、墨、鉛筆・紙	21.6×19.5	個人蔵	『旅』46巻10号(1972年)掲載原画
43	霧深きオロフレ峠	1972(昭和47)年	水彩、墨・厚紙	18.5×25.5	個人蔵	
44	はっぱの音がアイヌの笛 太郎北海道旅行の日(六郎しるす)	1972(昭和47)年頃	墨・厚紙	25.5×25.5	個人蔵	
45	『旅の絵本』より「空想の北海道」挿絵	1980(昭和55)年	水彩・厚紙	16.7×12.2	個人蔵	谷内六郎『旅の絵本』(1980年、旺文社)掲載原画
46	北の果の年輪	1961(昭和36)年	水彩・厚紙	37.1×26.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1961(昭和36)年4月10日号
47	まりもの夢	1980(昭和55)年	水彩・厚紙	40.0×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1980(昭和55)年10月2日号
48	つぎだらけの春	1954(昭和29)年	水彩・厚紙	29.5×40.5	個人蔵	

第三章 四季のシンフォニー

No.	作品・資料名	制作年(西暦・和暦)	技法・素材	サイズ縦×横(cm)	所蔵先	備考
49	波のピアノ	1951(昭和26)年	水彩・厚紙	37.8×48.8	個人蔵	
50	春の来る音	1951(昭和26)年	水彩、墨、鉛筆・紙	38.2×53.8	個人蔵	第一回文芸春秋漫画賞受賞作品—「行ってしまった子」より
51	春の音	1956(昭和31)年	水彩・紙	30.5×21.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1956(昭和31)年4月8日号
52	貝の夢	1961(昭和36)年	水彩・厚紙	36.2×27.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1961(昭和36)年8月28日号
53	わだちのシロホン	1962(昭和37)年	水彩・厚紙	39.0×28.3	横須賀美術館	『週刊新潮』1962(昭和37)年1月1日号
54	月光の曲	1962(昭和37)年	水彩・厚紙	38.7×27.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1962(昭和37)年10月1日号
55	夜明の音階	1964(昭和39)年	水彩・厚紙	39.0×28.3	横須賀美術館	『週刊新潮』1964(昭和39)年6月22日号
56	冬の曲	1967(昭和42)年	水彩・厚紙	39.0×27.8	横須賀美術館	『週刊新潮』1967(昭和42)年12月23日号
57	雨だれの春の序曲	1968(昭和43)年	水彩・厚紙	39.0×29.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1968(昭和43)年3月2日号
58	冬を刻む音	1968(昭和43)年	水彩・厚紙	40.3×28.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1968(昭和43)年12月7日号
59	小川の音	1974(昭和49)年	水彩・厚紙	42.0×30.5	横須賀美術館	『週刊新潮』1974(昭和49)年6月6日号
60	枯葉は昔のあそびをしている	1975(昭和50)年	水彩・厚紙	41.8×30.0	横須賀美術館	『週刊新潮』1975(昭和50)年11月20日号
61	風の音 スイスにて	1975(昭和50)年	水彩・厚紙	41.6×30.2	横須賀美術館	『週刊新潮』1975(昭和50)年12月4日号
62	月光のハーブ	1978(昭和53)年	水彩・厚紙	41.0×30.3	横須賀美術館	『週刊新潮』1978(昭和53)年11月16日号

第四章 壁画《芽の出る音》・設置50年

No.	作品・資料名	制作年(西暦・和暦)	技法・素材	サイズ縦×横(cm)	所蔵先	備考
63	《芽の出る音》原画	1972(昭和47)年	水彩、墨・紙	106.0×297.0	知内町中央公民館	
64	色紙一式	1972(昭和47)年	水彩・色紙	各27.0×24.4	いずれも個人蔵	

苫小牧市内出土ガラス玉の歴史的な位置づけについて — 他地域出土品との比較を中心に —

田村 朋美¹ 高橋 美鈴² 岩波 連³

1. 目的

苫小牧市内では続縄文文化期からアイヌ文化期のガラス玉が出土している。日本列島で出土したガラス玉類については、出土数の多い弥生～古墳時代を中心に製作技法や化学組成による分類が進み、種類ごとの時期的な変遷や地域性についても明らかとなってきている(Oga and Tamura 2013、大賀 2020など)。一方、北海道では、本州以南でガラス玉の出土が希薄になる中世以降においても多くのガラス玉が出土する。これらのガラス玉の材質にはカリ鉛ガラスおよびカリ石灰ガラスが含まれることが明らかとなってきているが、その時期変遷については不明な点が多い。筆者らは北海道でガラス玉が増加する中世相当期(12～16世紀)のアイヌ文化期のガラス玉の化学組成のバリエーションおよびその時期変遷について、一定の見通しを提示した(田村・高橋2020、2022)。

今回調査対象とした苫小牧市内出土のガラス玉の多くは、これまでも化学組成の分析調査が行われている(赤沼1987、赤沼・木村1989、木村・赤沼1992、赤石ほか2013、2014)。ただし、これらの先行研究では個々のガラス玉の組成的特徴を示すにとどまっており、他地域出土品との比較や時期変遷については今後の課題として残されていた(赤石ほか2014)。そこで本調査では、苫小牧市内出土のガラス玉について改めて材質調査を行い、続縄文文化期のガラス玉(タプコブおよび静川37出土品)については、本州以南の出土例と比較することで、時期的な検討を行うことを目的とした。さらに、アイヌ文化期に帰属するガラス玉については、時期的な位置付けがある程度可能な資料(静川22および弁天貝塚出土品)が存在することから、これらの分析結果をこれまで筆者らが蓄積してきた他地域の出土品と比較し、既報告(田村・高橋2022)では提示できなかった近世アイヌ文化期も含めたアイヌ文化期のガラス玉の時期変遷について考察する。

2. 資料

静川37遺跡

苫小牧市街地から10kmほど東部に所在し、静川台地西端の北西に伸びた樹枝状台地の舌状部上の標高18mの場所に位置する。調査は、道道上厚真苫小牧線改良工事に伴い、平成元年から3ヶ年にわたって実施された。ガラス玉は、樽前b降下物層(1667年降灰)下位にあたる1B層の包含層から2点が出土しており、続縄文文化期(後北A～D式期)のものと考えられる(苫小牧埋蔵文化財調査センター1992)。これらは、木村らによって分析がなされており、いずれもアルカリ石灰ガラスと報告されている(木村・赤沼1992)。いずれも引き伸ばし法で製作されたインド・パシフィックビーズで淡青色透明を呈する。

タプコブ遺跡

苫小牧市植苗地区に所在し、植苗を東西に二分して流れる美々川に架設された植苗橋の真向かい、国道36号に面した西側に位置する。昭和38年に当時北海道大学講師であった大場利夫と門

1 奈良文化財研究所 主任研究員

2 余市町教育委員会 学芸員

3 苫小牧市美術博物館 苫小牧市埋蔵文化財調査センター兼務 主任学芸員

別中学校教諭であった扇谷昌康によって、調査が実施された(第1次調査)。その翌年に2度、その後昭和40年に再び大場利夫によって、調査が行われた(第2～4次調査)。その後、国道36号改良工事に伴い、昭和58年に苫小牧市教育委員会(苫小牧市埋蔵文化財調査センター)によって調査が実施された(第5次調査)。調査では、縄文時代からアイヌ文化期にかけての遺構遺物が出土しており、ガラス玉は樽前b降下物層(1667年降灰)下位にあたる1B層から出土した。

出土点数はGP-8から13点、GP-14から2点で、いずれも続縄文文化期(後北期)に該当する。そのほか、包含層からも3点が出土した(苫小牧市教育委員会1984)。また、これらは木村及び赤石らによって分析調査が実施されている(木村・赤沼1992、赤石ほか2014)。今回は包含層出土品も含めて分析を実施した。包含層の1点(No.32)以外はすべて引き伸ばし法による典型的なインド・パシフィックビーズである。No.32は、いわゆる蜜柑玉で、巻き付け法で小玉を製作したのち、工具で5箇所溝を施し5弁の花弁状に成形している。

静川22遺跡

苫小牧東部開発地域内に所在し、安平川左岸の標高20m程の丘陵部に位置している。昭和56年、57年の2ヶ年にわたって計13,064㎡が調査され、縄文時代早期からアイヌ文化期にかけての遺構・遺物が多量に出土した。ガラス玉は、調査区中央部から東寄りの標高約18mの平坦部で東西約80m、南北10～15mの範囲内に鹿骨を主体とする獣骨の集積8か所のうち、1号、2号、3号、5号獣骨群の樽前b降下物層(1667年降灰)下位にあたる1B層から計12点が出土している。このうち、2号獣骨群から出土した2点は、白地に濃紺色で入組文様が施されている。また、白地に白の入組文様が施されているものも存在する。これらは木村及び赤石らによって分析調査が実施されている(木村・赤沼1992、赤石ほか2014)。

緑ヶ丘遺跡

緑ヶ丘遺跡は市街地の北側の緑ヶ丘公園内に所在し、岬状に突き出た丘陵先端部に位置するが、現在は削平されている。調査は昭和41年に大場利夫によって実施され、続縄文文化期の墓8基とアイヌ文化期の墓1基が検出された。本ガラス資料は、樽前b降下物層下位のアイヌ墓の坑底から180点あまりが出土したものである。また、これらの一部は木村ら及び赤石らによって分析が行われている(木村・赤沼1992、赤石ほか2013)。本調査では、先行研究で分析された20点を含む136点について材質分析を行った。内訳は直径5mm前後の小型品126点(管状を呈するものを1点含む)、直径が8mmを超えるような大型品10点であり、いずれも巻き付け法で製作されている。小型品の色調は、紺色透明、緑色透明、赤色透明、白色不透明で、大型品には青色透明、緑色透明、白色不透明が存在する。

弁天貝塚

苫小牧市内の勇払原野と呼ばれる低地帯にある弁天地区に所在し、勇払市街の東側を流れる安平川左岸付近の海浜部に位置する。昭和61年から3ヶ年にわたって苫小牧市教育委員会(苫小牧市埋蔵文化財調査センター)による学術調査が行われ、江戸時代末から明治時代にかけての遺構遺物が確認された。調査では、アイヌ文化期のもと思われるガラス玉12点が出土している(苫小牧市教育委員会1989)。このうち3点については、赤沼らによって分析が行われている(赤沼1987、赤沼・木村1989)。また、その後、赤石らにより再調査が実施されている(赤石ほか2013)。本調査でもこれら12点について材質調査を実施した。

3. 方法

ガラス玉の化学組成分析には蛍光X線分析を適用した。使用した装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製 EAGLE III)である。測定にあたっては、新鮮な破断面など風化

の影響ができるだけ少ない箇所を選択し、表面をエチルアルコールおよび超音波を用いて洗浄した上で測定した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法(FP法)により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。励起用X線源はRh管球、管電圧は20kV、管電流は200 μ A、X線照射径は50 μ m、計数時間は300秒とし、測定は真空中で実施した。

4. 結果と考察

静川37遺跡

続縄文文化期(後北A～D式期)のものと考えられるガラス玉2点が出土しており、既報告(木村・赤沼1992)でアルカリ石灰ガラスと報告されている。今回分析を行った結果、カリガラスであることが確認された(表1)。既往研究において、日本列島で出土するカリガラスは、アルミニウム(Al_2O_3)とカルシウム(CaO)の含有量から二種類(Group PI、Group PII)に大別され、さらにGroup PIはコバルト着色の紺色カリガラスに、Group PIIは銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている(Oga and Tamura 2013)。本資料はGroup PIIのカリガラスに相当するものであった(図1)。さらに、着色剤についても、銅(CuO)を1.46-1.56%含有しており、銅イオンが主要な着色要因である。わずかに錫(SnO_2)および鉛(PbO)を含有しており、着色剤として利用された銅原料が青銅の可能性を示している。本遺跡出土ガラス小玉2点は、着色剤についても典型的なGroup PIIの特徴を有すると言える。

本州以南の出土状況との比較から、これらのガラス小玉の流入時期について検討する。2点ともGroup PIIのカリガラスで端面が研磨されていないことを評価すると、大賀克彦(2020)による時期区分における様相3(弥生時代後期前葉)に該当する可能性が高い。弥生時代から古墳時代における北海道への玉類の流入には4回の契機(第一波：後北B式～後北C 1式期、第二波：後北C2・D式期、第三波：古墳時代前期後半、第四期：古墳時代中期後葉～後期前葉)があるとされる(大賀2021)。出土数が少ないため慎重な判断が必要であるが、静川37遺跡出土のガラス小玉は、第一波に伴って後北C 1式期に流入した可能性がある。

タブコブ遺跡

続縄文文化期(後北期)に帰属するとされるGP-8およびGP-14出土のガラス小玉は、既報告(赤石ほか2014)でも述べられているように、本調査においてもカリガラスであることが確認された。これらのうち、紺色透明を呈するもの(No.14～27)は、コバルト(CoO)を0.04-0.06%含有しており、コバルトイオンが主要な着色成分である。コバルト原料の特徴として、不純物と考えられるマンガン(MnO)を1～2%前後含有し、銅(CuO)および鉛(PbO)の含有量がきわめて少ない(0.1%未満)。一方、淡青色透明を呈する1点(No.28)は、 CuO の含有量が多く(1.6%)、銅イオンが主要な着色要因で、微量の鉛と錫(SnO_2)を含有する。基礎ガラスの種類と着色剤の関係から、紺色透明を呈するNo.14～27は、Group PIのカリガラス、淡青色透明を呈する1点(No.28)はGroup PIIに相当する(図1)。

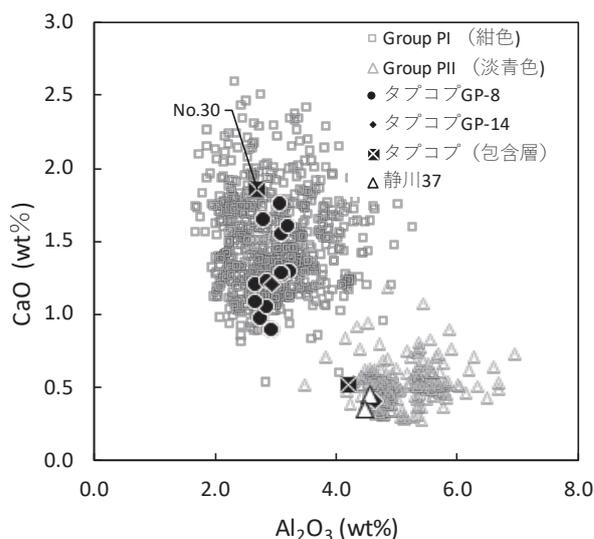


図1 化学組成によるカリガラスの分類

タプコブ遺跡GP-8出土のガラス小玉は、いずれも直径が5mmを超えるGroup PIのカリガラスの大型品の破片である。GP-14についてもやはり大型のGroup PIのカリガラス小玉とGroup PIIのカリガラス小玉の組み合わせである。本州以南の状況と比較すると、大型のGroup PIのカリガラス小玉を主体にする構成は大賀(2020)における様相4bに相当し、弥生時代後期後葉に特徴的なガラス玉の構成であるが、関東を中心とした東日本では古墳時代前期前半まで普遍的にみられることが確認されている(大賀2021)。さらに、本資料はいずれも端面に研磨の痕跡が認められることから、日本列島への流入時期(弥生時代後期後葉)からは一定時間が経過していることが推定される。以上のことから、タプコブ遺跡GP-8およびGP-14出土品は続縄文文化期の後北C2・D式期に帰属し、第二波に伴う流入であると考えられる。なお、第二波は南関東から北海道への直接的な流入が想定されている(大賀2021)。

さらに本調査では、包含層から出土したガラス玉についても分析を実施した。その結果、No.30およびNo.31はカリガラスで、No.31はカリ鉛ガラス(材質I(田村・高橋2022))であった。このうち、青紺色透明を呈するNo.30は、基礎ガラスはGroup PIに類似するものの、着色剤として銅(CuO)とコバルト(CoO)、マンガン(MnO)を含む特殊なカリガラスであることが判明した。このようなカリガラスの類例は少ないものの、日本列島では弥生時代中期後半の中国地方から丹後半島にかけての日本海側を中心にいくつか出土している(大賀・田村2016、田村2016)。ただし、本資料は両端面が顕著に研磨されており、白玉状に整形されている。このような研磨痕を持つカリガラス小玉は大賀(2020)における様相7(古墳時代中期前半)に特徴的な形態である。ただし、様相7段階のガラス玉の北海道への流入は少なく、確実な事例は厚真町朝日遺跡が挙げられる程度であるとされる(大賀2021)。いずれにしても、北海道への流入時期はGP-8およびGP-14出土品よりも降るものである。

No.31は淡青色透明を呈する小玉でGP-14から出土したNo.28と同種のカリガラス(Group PII)であり、端面もわずかに研磨されている点も共通する。GP-8やGP-14出土品と異なり完形品であることから墳墓出土品に伴うものではないと考えられるが、北海道への流入は後北C2・D式期の第二波に伴うものと推察される。

No.32の蜜柑玉については、余市町大川GP600から類似の蜜柑玉が20点以上出土しており、組成的特徴が共通する(田村・高橋2022)。カリ鉛ガラスの中でも北海道では15世紀以降に流通した新相のカリ鉛ガラス(材質I(新)(田村・高橋2022))に相当する(図2)。1640年の駒ヶ岳噴火から1663年の有珠山噴火までという埋納時期が明らかになっている有珠4遺跡GP001からもまとまって出土するなど(伊達市噴火湾文化研究所2009、新免・齋藤2009)、17世紀半ばに流通量が多いことから、当該期の混入品であろう。

静川22遺跡

樽前b降下物層(1667年降灰)下位にあたる1B層から出土した12点のガラス小玉について材

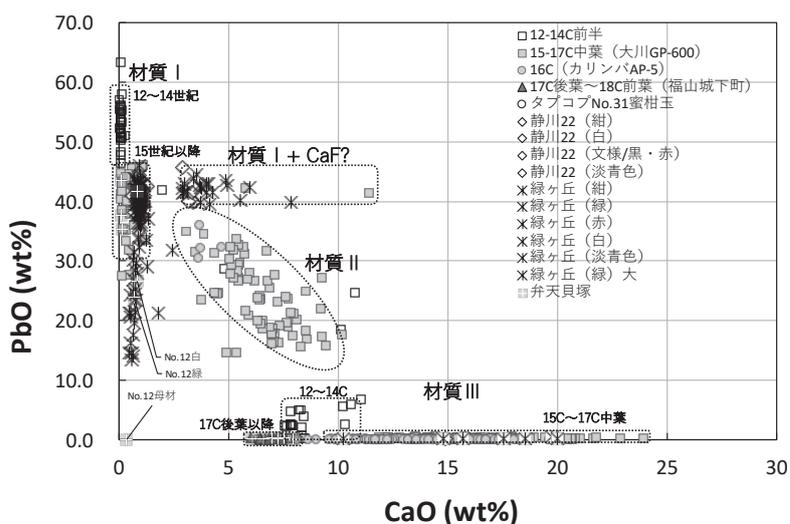


図2 中世(12C)以降のガラスの材質分類

質調査を実施した。先行研究(木村・赤沼1992、赤石ほか2014)の報告では、No.13のみアルカリ石灰ガラスまたはカリ石灰ガラスで、それ以外は鉛ガラスであると報告されている(No.2の母玉は「珪酸塩ガラス」)。本調査でも概ね同様の結果が得られたが、No.2～12のガラスには鉛(PbO)に加えてカリウム(K₂O)が6.6-9.7%含まれている。さらに、これらのうち、白色不透明ガラス(No.2母玉、No.3・4の加飾部、No.5、6、10)については、3.3%程度のカルシウム(CaO)を含む。一方、No.13はPbOが極めて少なく(1%未満)、K₂OとCaOの含有量がそれぞれ14.2%および14.9%と多い。

着色に関与する成分については、No. 2の入組文加飾部の赤褐色ガラス部は母材よりも銅(CuO)、亜鉛(ZnO)および鉄(Fe₂O₃)が顕著に多く、銅コロイド着色によると推察される。No.3およびNo.4の母玉部分に関しては、既報告で指摘されたマンガン(MnO)を0.32-0.33%含有する以外にコバルト(CoO)がわずかに検出された。この特徴は、紺色透明を呈するNo.5、7、10、11、12と共通しており、これらはいずれもコバルト着色による紺色を呈する同種のガラスであると言える。MnOが含まれていることで暗色となり、入組文の母玉の場合はガラス層が厚いため、光の透過率が低く黒に近い外観を呈していると考えられる。なお、MnOはコバルト原料の不純物と考えられ、呉須土(鉄やコバルトを含むマンガン土)が着色剤として利用されたと推察される。淡青色透明を呈するNo.13について銅着色である(CuO:0.89%)。亜鉛(ZnO)は極めて少ない。

筆者らはPbOとCaOの含有量でアイヌ文化期以降の北海道で流通したガラス玉の材質を3種類(材質Ⅰ～Ⅲ)に分類している(田村・高橋2022)。静川22遺跡出土のガラス玉について、この材質分類への帰属について検討した。鉛を多く含むガラスのうち、白色不透明以外のガラス(No.2加飾部赤褐色ガラス、No.3・4の母玉およびNo.5、7、10、11、12の紺色ガラス)については、材質Ⅰ(カリ鉛ガラス)のうち、PbOが35-45%程度で15世紀以降に流通する新相(材質Ⅰ(新))に相当する。

一方、白色不透明ガラス(No.2母玉、No.3・4の加飾部、No.5、6、10)はCaO含有量がやや多く、余市町大川GP-600出土のガラス玉などから設定した材質Ⅱ(カリ石灰鉛ガラス)と重複する部分もあるが、材質ⅡではCaOとPbOとの間に負の相関が認められるのに対して、静川22遺跡の白色不透明ガラス

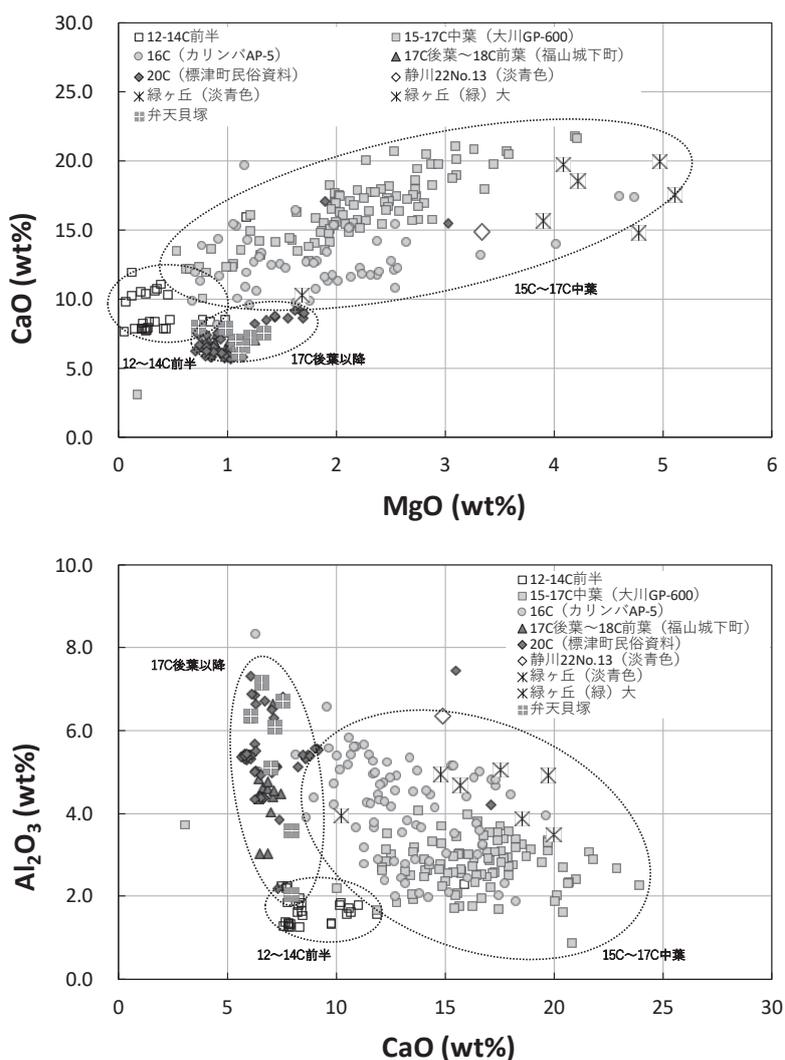


図3 材質Ⅲ(カリ石灰ガラス)の特性化
(上: CaO vs. MgO, 下: Al₂O₃ vs. CaO)

玉は、紺色や赤褐色のガラスと比較してPbOの含有量に差異はなく、CaOのみ多いことが分かる。すなわち、材質ⅠとⅢとの混合の可能性も想定される材質Ⅱとは異なり、静川22遺跡の白色不透明ガラスは、材質Ⅰのかり鉛ガラスに乳化剤としてフッ化カルシウム(CaF) (蛍石)を添加したものである可能性が想定される。今回の調査ではフッ化カルシウムの有無についての調査を実施していないが、中世以降のかり鉛ガラスやかり石灰ガラスからフッ化カルシウムが検出された事例は多い(田村・高橋2020など)。

No.13についてはPbOの含有量が0.25%と少なく、かり石灰ガラス(材質Ⅲ)に相当する。筆者らは材質Ⅲについて、12～14世紀前半に流通したものと15～17世紀中葉頃までに流通したのでは、MgOとCaOの含有量から区別できることを示したが(田村・高橋2022)、本資料は、カリンバAP-5など中世相当期(15～17世紀)のものと共通の化学組成を有するものであった(図3上)。

緑ヶ丘遺跡

樽前b降下物層(1667年降灰)下位にあたるアイヌ墓の坑底から180点あまりが出土したもののうち136点について分析を実施した。小型品126点と大型品3点(No.8、9、23)が鉛を多く含むガラスである。鉛(PbO)の含有量には幅があるものの、肉眼観察で風化の影響が少ないものは概ねPbOが35%～45%にまとまる傾向がある。PbOを35%～45%含むものはカリウム(K₂O)を6～9%含有し、PbOが減少している個体はK₂Oも比例的に減少している。いずれも風化による影響で減少したと推察される。

紺色透明のものからはコバルトが検出されており(CoO:0.04%前後)さらにMnOを0.3～0.4%前後伴う点で、上述の静川22遺跡の出土品と類似する。着色剤以外の基礎ガラス成分についても共通する。緑色透明および赤色透明のものは静川22遺跡では出土していないが、基礎ガラス成分は紺色透明のものと共通する。いずれも銅着色であるが、緑色についてはCu²⁺-O-Cu⁺結合子による発色、赤色は還元雰囲気で溶融することによる金属銅コロイド着色であると考えられる。白色不透明のものについては、CaOを1.8～7.8%(大半は3～4%)含有する点で他の色調のものとは異なるが、静川22遺跡の白色不透明ガラスと同様に、材質Ⅰのかり鉛ガラスに乳化剤としてフッ化カルシウム(CaF)を添加したものである可能性がある。材質分類としては、紺色、緑色、赤色透明が新相のかり鉛ガラス(材質Ⅰ(新))、白色不透明のものは、材質Ⅰ(新)に乳濁剤としてフッ化カルシウム(CaF)を添加したものと考えている。

一方、大型品のうち7点(No.4、5、10、11、12、21、22)はPbOが極めて少なく(1%未満)、K₂OおよびCaOが多いかり石灰ガラス(材質Ⅲ)であった(図2)。緑色透明のものと青色透明のものがあるが、いずれも銅着色で、着色に関与する成分にも大差はなく、溶融雰囲気の差異が色調に影響したものと推測される。上述の静川22遺跡例と同様に、15～17世紀中葉のかり石灰ガラスと共通の化学組成の特性を持つことが示された。

弁天貝塚

江戸時代末から明治時代にかけての資料で、本調査対象の中では最も新しい時期に帰属する資料である。赤石らの再調査により、5点が鉛ガラス、3点がアルカリ石灰ガラス、4点がかり石灰ガラスと報告されている(赤石他2013)。本調査の結果、赤石らが指摘した5点の鉛ガラスのうち、No. 3、7、8、9については、PbO含有量が35-43%、K₂O含有量が8.1-10.7%、CaO含有量が1%未満であることから、15世紀以降に流通した新相のかり鉛ガラス(材質Ⅰ(新))であることが分かった。No. 3は着色に関与する成分としてMnOとCuOの含有量が多く、これらが黒色の着色要因である。No. 7はMnOによって濃紫色を呈する。No. 8の蜜柑玉は無色透明であるが、一部に紫色を呈する部分が存在する。本調査では無色透明部分を測定した。亜鉛(ZnO)を0.91%

含むのが特徴である。由来は明らかでないが、鉛原料に伴う可能性がある。無色のカリ鉛ガラスでZnOが多いガラスは、他にも余市町大川GP-600でも確認されているが(田村・高橋2022)、本資料は大川GP-600例よりもZnO量が顕著に多い点でやや異なる。No. 9は褐色透明で鉄による着色である。

No.12は白色不透明の胎部に青緑色不透明と白色不透明のガラスが帯状に貼り付けられている。胎部はアルミニウム(Al_2O_3)含有量が13%と多い特異な組成を有する。ガラスではなく焼結物である可能性も否定できない。一方、表面に被せられているのはカリ鉛ガラスであるが、上述の材質Ⅰ(新)と比較するとPbOが少ない。白色不透明部に関してもCaOの含有量が少なく、フッ化カルシウム(CaF)による乳濁ではない。これまでのところ確実な類例はなく、特殊なものである。

これら以外の7点はPbOが極めて少なく(1%未満)、 K_2O およびCaOが多いカリ石灰ガラス(材質Ⅲ)であった。さらに、材質Ⅲの中でも17世紀後葉から18世紀前葉に比定される松前町福山城下町遺跡(田村・高橋2024)や標津町の民俗資料(20世紀)と化学組成が共通することがわかった(図3)。一方、上述の静川22No.13や緑ヶ丘遺跡で出土したカリ石灰ガラスをはじめ、15世紀～17世紀中葉のカリ石灰ガラスとはCaO、MgO、 Al_2O_3 などの含有量が異なることがわかった。

5. 結語

本調査において、続縄文文化期に相当する静川37遺跡とタプコブ遺跡のガラス玉については、本州以南のガラス玉との比較から、前者は後北C1式期に、後者は後北C2・D式期に流入した可能性を提示することができた。さらに、タプコブ遺跡の包含層から出土したガラス玉3点の帰属時期についても一定の位置づけを与えることができた。具体的には、包含層出土品のうち1点はGP-8やGP-14と同じく後北C2・D式期に流入したものであったが、1点は北海道へのガラス玉の流入が希薄となる古墳時代中期前葉並行期に流入した可能性があるもので、もう1点は15世紀以降に流通したカリ鉛ガラス(材質Ⅰ(新))であり、17世紀中葉頃までの出土事例が多いものであった。

アイヌ文化期に相当する静川22遺跡、緑ヶ丘遺跡、弁天貝塚からは、カリ鉛ガラス(材質Ⅰ)とカリ石灰ガラス(材質Ⅲ)が確認された。カリ鉛ガラス(材質Ⅰ)はいずれも15世紀以降の北海道で流通した新相(材質Ⅰ(新))であった。ただし、中世相当期と近世相当期においては化学組成に明確な差異は見いだせなかった。一方、カリ石灰ガラス(材質Ⅲ)については、樽前b降下物層(1667年降灰)前後で材質的特徴が変化することが示された。筆者らは材質Ⅲについて、12～14世紀前半に流通したものと15～17世紀ごろに流通したものでは化学組成に差異があることを示していたが(田村・高橋2022)、さらに樽前b降下物層前後で K_2O 、CaO、 Al_2O_3 などの含有量に差異があることが示されたことで、アイヌ文化期のカリ石灰ガラス(材質Ⅲ)は化学組成により3段階に区分できる可能性が高まった。アイヌ文化期のガラス玉の材質変遷モデルの確立につながる重要な知見が得られたと言える。

参考文献

- 赤石慎三・越田賢一郎・中村和之・竹内孝 2013 「苫小牧市内遺跡出土のガラス玉について(1)」
『苫小牧市博物館館報』10, pp.15-23
- 赤石慎三・越田賢一郎・中村和之・竹内孝 2014 「苫小牧市内遺跡出土のガラス玉について(2)」
『苫小牧市博物館館報』11, pp.17-27

- 赤沼英男 1987 「第4節 弁天貝塚出土ガラスの分析」『弁天貝塚Ⅰ～幕末以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書～』 苫小牧市埋蔵文化財センター, p.69
- 赤沼英男・木村克則 1989 「第2節 弁天貝塚出土ガラスの分析」『弁天貝塚Ⅲ～幕末以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書～』 p.82
- 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる(古川登さん退職記念 献呈考古学文集)』 pp.55-64
- 大賀克彦 2021 「猪ノ鼻(1)遺跡出土の玉類」『猪ノ鼻(1)遺跡』 pp.190-202
- 大賀克彦・田村朋美 2016 「日本列島出土カリガラスの考古科学的研究」『：古代学(奈良女子大学古代学学術研究センター)』 8, pp.11-23
- 木村克則・赤沼英男 1992 「第4節 静川37遺跡出土ガラス玉の分析」『静川37』 苫小牧埋蔵文化財センター, pp.97-100
- 田村朋美 2016 「杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の自然科学的調査」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』 pp.246-251
- 田村朋美・高橋美鈴 2020 「擦文末期～アイヌ文化期初期におけるガラス玉の起源と流入経路」『北海道考古』 56, pp.1-20.
- 田村朋美・高橋美鈴 2022 「アイヌ文化期の遺跡出土ガラス玉の材質的特徴と時期変遷」『北海道考古』 58, pp.45-66.
- 田村朋美・高橋美鈴 2024 「福山城下町遺跡出土ガラス 製遺物の自然科学分析」『松前町福山城下町遺跡一町道朝日豊岡線代行事業改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書一』付編Ⅰ-10(デジタル版)
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター 1984 『タプコプ』 北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター 1989 『弁天貝塚Ⅲ～幕末以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書～』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992 『静川37遺跡』 道道上厚真苫小牧線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9, pp.65-65.

表1 蛍光X線分析結果

出土遺構	番号	分析箇所	色調	透明感	分析結果		重量濃度 (%)																non-std		
					大別	細分	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	SnO ₂
静岡 37	1		淡青色	透明	カリ	Group PII	1.5	0.9	4.5	75.9	0.1	13.8	0.4	0.14	0.02	0.02	0.50	0.01	1.56	0.02	0.32	0.05	0.02	0.15	0.24
	2		淡青色	透明	カリ	Group PII	2.8	1.0	4.5	75.0	0.1	13.7	0.3	0.14	0.02	0.01	0.49	0.01	1.46	0.02	0.29	0.04	0.02	0.14	0.34
タブコブ	8号墳墓	14	紺色	透明	カリ	Group PI	2.1	1.2	3.2	73.0	0.1	15.6	1.3	0.16	0.02	1.47	1.60	0.04	0.03	0.01	0.03	0.03	0.03	0.13	
		15	紺色	透明	カリ	Group PI	1.9	1.2	3.1	73.8	0.1	14.7	1.5	0.14	0.02	1.31	1.84	0.04	0.03	0.02	0.03	0.04	0.03	0.12	
		16	紺色	透明	カリ	Group PI	1.5	1.0	2.7	77.5	0.1	13.8	1.2	0.11	0.02	1.00	0.75	0.04	0.03	0.02	0.03	0.04	0.03	0.11	
		17	紺色	透明	カリ	Group PI	2.0	0.9	2.7	77.8	0.0	13.3	1.0	0.12	0.02	1.06	0.85	0.04	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.08	
		18	紺色	透明	カリ	Group PI	1.2	1.3	2.8	86.0	0.1	3.7	1.6	0.16	0.03	1.48	1.32	0.05	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.09	
		19	紺色	透明	カリ	Group PI	2.0	1.0	3.1	74.8	0.1	14.6	1.3	0.15	0.02	1.40	1.40	0.04	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.11	
		20	紺色	透明	カリ	Group PI	2.3	1.2	2.9	77.6	0.1	11.7	1.1	0.16	0.02	1.51	1.25	0.05	0.03	0.02	0.03	0.03	0.03	0.10	
		21	紺色	透明	カリ	Group PI	1.4	0.7	2.9	75.1	0.0	14.5	1.2	0.17	0.02	2.17	1.52	0.06	0.03	0.02	0.02	0.04	0.03	0.11	
		22	紺色	透明	カリ	Group PI	1.4	1.1	2.9	78.1	0.1	12.1	0.9	0.15	0.03	1.52	1.46	0.04	0.03	0.01	0.03	0.03	0.03	0.09	
		23	紺色	透明	カリ	Group PI	1.6	1.1	3.2	73.5	0.1	15.3	1.6	0.15	0.02	1.37	1.88	0.05	0.03	0.01	0.02	0.04	0.04	0.12	
		24	紺色	透明	カリ	Group PI	1.7	1.1	3.1	74.0	0.1	14.8	1.3	0.17	0.02	1.81	1.53	0.06	0.03	0.02	0.03	0.05	0.04	0.13	
		25	紺色	透明	カリ	Group PI	1.4	1.0	2.7	79.5	0.1	11.9	1.1	0.11	0.02	0.84	1.15	0.04	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03	0.10	
		26	紺色	透明	カリ	Group PI	1.8	0.9	3.1	71.1	0.1	17.6	1.8	0.16	0.03	1.72	1.44	0.05	0.03	0.02	0.03	0.04	0.05	0.09	
		14号墳墓	27	紺色	透明	カリ	Group PI	1.9	1.0	2.9	75.3	0.0	13.5	1.2	0.17	0.03	2.14	1.51	0.06	0.04	0.02	0.03	0.04	0.03	0.11
28	淡青色		透明	カリ	Group PII	2.2	1.0	4.6	76.1	0.1	12.8	0.4	0.15	0.02	0.02	0.50	0.01	1.60	0.02	0.35	0.05	0.02	0.10		
包含層	30	紺色	透明	カリ	分類外	1.6	1.1	2.7	83.9	0.2	3.9	1.9	0.17	0.03	2.79	0.81	0.02	0.80	0.02	0.03	0.03	0.04	0.11		
	31	淡青色	透明	カリ	Group PII	1.5	0.9	4.2	76.5	0.0	13.0	0.5	0.14	0.02	0.02	0.57	0.01	1.80	0.02	0.49	0.08	0.03	0.13	0.26	
32	青色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.2	1.1	42.7	1.5	10.9	1.0	0.04	0.03	0.04	0.17	0.02	0.75	0.18	0.40	0.15	0.04	0.18	0.41		
静岡 22	2	母玉	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.6	0.3	1.6	43.6	1.5	8.3	3.2	0.03	0.02	0.06	0.08	0.02	0.66	0.02	0.02	0.39	0.05	0.21	0.42
		加飾部	赤色	不透明	カリ鉛	材質I(新)	1.4	0.1	1.9	39.4	1.5	9.7	0.7	0.05	0.02	0.07	1.71	0.02	2.65	1.96	38.09	0.03	0.17	0.56	
	3	母玉	濃紺色	不透明	カリ鉛	材質I(新)	0.7	0.3	1.7	42.4	1.6	8.5	1.0	0.04	0.03	0.32	0.24	0.04	0.11	0.02	42.24	0.05	0.20	0.59	
		加飾部	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.3	0.2	1.3	42.5	1.5	8.9	3.3	0.03	0.02	0.08	0.13	0.02	0.09	0.02	40.71	0.05	0.22	0.65	
	4	母玉	濃紺色	不透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.1	1.6	42.2	1.7	8.8	1.0	0.04	0.03	0.33	0.25	0.03	0.10	0.02	42.45	0.04	0.23	0.51	
		加飾部	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.5	0.2	1.3	43.4	1.5	8.7	3.4	0.02	0.02	0.06	0.14	0.02	0.08	0.02	39.90	0.05	0.21	0.57	
	5	母玉	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.5	0.5	1.0	40.1	1.5	6.9	2.9	0.02	0.02	0.04	0.09	0.02	0.12	0.02	45.58	0.05	0.19	0.49	
	6	母玉	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.9	0.2	1.1	41.7	1.7	8.6	3.4	0.02	0.02	0.05	0.12	0.02	0.12	0.02	41.47	0.03	0.20	0.45	
	7	母玉	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	1.0	0.4	1.5	43.5	1.6	8.8	0.6	0.02	0.02	0.38	0.16	0.04	0.23	0.04	40.99	0.04	0.19	0.48	
	8	母玉	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.7	0.2	1.5	42.9	1.8	7.1	1.1	0.03	0.03	0.35	0.11	0.05	0.22	0.02	43.32	0.05	0.17	0.51	
	9	母玉	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.5	0.2	1.3	42.1	1.7	7.3	0.9	0.03	0.03	0.29	0.10	0.04	0.16	0.02	44.39	0.05	0.20	0.64	
	10	母玉	白色	不透明	カリ鉛	材質I(新)+Ca?	0.7	0.3	1.4	43.6	1.5	7.6	3.3	0.02	0.02	0.05	0.10	0.02	0.17	0.02	40.45	0.04	0.19	0.51	
	11	母玉	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	1.1	0.1	1.5	42.6	1.6	6.6	0.9	0.05	0.02	0.48	0.33	0.07	0.08	0.01	43.84	0.05	0.18	0.49	
12	母玉	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.8	0.2	1.5	41.6	1.6	8.9	1.3	0.03	0.03	0.40	0.24	0.04	0.15	0.03	42.49	0.05	0.19	0.44		
13	母玉	淡青色	透明	カリ石灰	材質I(新)+Ca	2.7	3.3	6.3	56.2	0.2	14.2	14.9	0.25	0.01	0.02	0.49	0.01	0.89	0.02	0.25	0.01	0.06	0.12		
緑ヶ丘	小玉1	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.3	1.9	50.2	1.3	7.2	1.0	0.03	0.02	0.34	0.17	0.04	0.07	0.02	35.93	0.03	0.18	0.48		
	小玉2	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.3	1.7	48.7	1.4	8.6	1.0	0.02	0.02	0.39	0.15	0.04	0.10	0.02	36.47	0.04	0.16	0.40		
	小玉3	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.7	0.3	1.6	44.8	1.5	7.7	1.0	0.02	0.02	0.37	0.19	0.05	0.07	0.02	41.05	0.03	0.19	0.40		
	小玉4	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.8	0.2	1.5	42.6	1.9	7.8	1.0	0.02	0.02	0.52	0.20	0.04	0.14	0.02	42.62	0.04	0.15	0.39		
	小玉5	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.7	0.2	1.3	44.0	1.6	7.8	0.8	0.03	0.02	0.36	0.20	0.04	0.10	0.02	42.09	0.05	0.20	0.49		
	小玉6	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.4	0.2	1.5	45.9	1.6	7.7	1.0	0.03	0.03	0.48	0.19	0.04	0.13	0.02	40.16	0.04	0.18	0.44		
	小玉7	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.4	0.1	1.5	45.1	1.6	7.9	1.0	0.02	0.02	0.50	0.20	0.04	0.13	0.02	40.86	0.04	0.17	0.42		
	小玉8	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.1	2.1	60.4	2.1	4.2	0.7	0.02	0.02	0.27	0.17	0.04	0.06	0.02	28.56	0.03	0.15	0.32		
	小玉9	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	1.1	0.2	1.5	44.9	1.5	7.7	0.9	0.02	0.02	0.49	0.20	0.04	0.14	0.02	40.57	0.04	0.16	0.44		
	小玉10	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	1.0	0.2	1.5	44.4	1.6	8.3	0.8	0.03	0.03	0.34	0.13	0.05	0.09	0.02	40.59	0.04	0.20	0.57		
	小玉11	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.5	0.1	1.6	46.6	1.5	8.7	1.1	0.03	0.02	0.41	0.16	0.03	0.10	0.03	38.35	0.03	0.16	0.46		
	小玉12	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.3	0.2	1.5	45.7	1.5	8.7	1.1	0.02	0.03	0.41	0.18	0.03	0.12	0.02	39.56	0.04	0.17	0.39		
	小玉13	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.5	0.2	1.5	42.8	1.7	8.0	0.8	0.02	0.03	0.35	0.15	0.05	0.08	0.02	42.96	0.04	0.22	0.53		
	小玉14	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.7	0.3	1.4	43.6	1.6	8.4	0.8	0.02	0.02	0.34	0.13	0.05	0.08	0.02	42.07	0.05	0.20	0.39		
	小玉15	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.1	1.4	44.1	1.6	8.5	0.8	0.02	0.03	0.36	0.14	0.05	0.08	0.02	41.56	0.03	0.20	0.42		
	小玉16	紺色	透明	カリ鉛	材質I(新)	0.6	0.3	2.8	69.8	0.5	2.9	0.7	0.02	0.02	0.31	0.29	0.03	0.04	0.01	21.31	0.03	0.10	0.19		
	小玉17	紺色	透明</																						

苦小牧市美術博物館紀要 第10号 2025年3月

出土遺構	番号	分析箇所	色調	透明感	分析結果		重量濃度 (%)																non-std SnO ₂		
					大別	細分	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O		SrO	ZrO ₂
緑ヶ丘 (続き)	小玉 61	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.1	0.2	1.4	42.9	1.7	5.4	1.1	0.03	0.02	0.06	0.55	0.02	1.49	0.43	42.91	0.05	0.18	0.46		
	小玉 62	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.3	1.4	45.0	1.5	9.3	0.9	0.04	0.03	0.07	0.49	0.02	1.29	0.29	38.04	0.04	0.19	0.54		
	小玉 63	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.1	1.1	43.0	1.5	7.4	1.0	0.03	0.02	0.05	0.69	0.02	1.58	0.50	41.42	0.04	0.20	0.59		
	小玉 64	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.0	0.1	1.2	42.6	1.7	8.0	1.1	0.02	0.02	0.06	0.31	0.02	1.85	0.44	40.97	0.04	0.19	0.41		
	小玉 65	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.5	0.2	1.3	46.3	1.5	7.3	0.9	0.03	0.02	0.03	0.35	0.02	1.09	0.36	38.39	0.06	0.17	0.46		
	小玉 66	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.1	1.6	49.5	1.4	5.7	0.9	0.03	0.02	0.04	0.36	0.02	1.09	0.34	37.63	0.04	0.17	0.41		
	小玉 67	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.4	0.2	1.2	46.3	1.5	8.1	0.9	0.02	0.02	0.04	0.37	0.02	1.13	0.35	37.95	0.03	0.15	0.41		
	小玉 68	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.2	1.4	44.8	1.6	7.1	0.8	0.04	0.02	0.04	0.33	0.02	1.52	0.38	40.39	0.03	0.17	0.47		
	小玉 69	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.5	0.2	1.3	43.2	1.6	6.5	1.1	0.02	0.02	0.06	0.44	0.02	1.25	0.42	41.50	0.04	0.22	0.57		
	小玉 70	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.9	0.1	1.7	51.6	1.2	7.0	0.9	0.02	0.02	0.04	0.31	0.01	1.68	0.49	33.60	0.04	0.15	0.34		
	小玉 71	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.2	1.3	46.0	1.4	6.8	0.9	0.03	0.02	0.04	0.67	0.02	1.47	0.48	39.20	0.04	0.18	0.53		
	小玉 72	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.1	1.3	45.7	1.5	7.3	1.0	0.03	0.02	0.05	0.69	0.02	1.51	0.47	39.03	0.04	0.19	0.41		
	小玉 73	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.2	1.4	45.0	1.5	7.4	1.0	0.02	0.02	0.04	0.70	0.02	1.54	0.50	39.38	0.05	0.16	0.43		
	小玉 74	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.1	0.2	1.2	42.4	1.6	8.5	1.0	0.03	0.02	0.04	0.34	0.01	0.91	0.56	40.33	0.03	0.15	0.50		
	小玉 75	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.0	0.3	1.9	61.0	1.1	3.5	0.8	0.04	0.02	0.04	0.54	0.01	1.03	0.30	27.95	0.02	0.13	0.33		
	小玉 76	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.4	0.1	1.7	58.2	0.9	5.6	0.8	0.02	0.02	0.03	0.31	0.01	1.45	0.44	29.55	0.03	0.14	0.32		
	小玉 77	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.4	0.2	1.6	49.0	1.3	6.7	0.9	0.02	0.02	0.03	0.33	0.01	1.81	0.52	36.46	0.04	0.20	0.43		
	小玉 78	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.2	1.4	44.0	1.5	8.6	1.0	0.02	0.03	0.04	0.35	0.02	1.89	0.55	39.10	0.03	0.21	0.36		
	小玉 79	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.2	1.2	47.0	1.5	7.3	1.0	0.04	0.02	0.06	0.70	0.02	1.50	0.47	37.73	0.04	0.16	0.36		
	小玉 80	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.9	0.1	1.4	51.0	1.3	7.2	0.9	0.02	0.02	0.03	0.32	0.02	1.69	0.50	34.05	0.03	0.14	0.36		
	小玉 81	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.2	1.3	43.9	1.5	7.8	1.0	0.03	0.02	0.04	0.73	0.02	1.63	0.49	39.84	0.04	0.20	0.39		
	小玉 82	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.1	0.0	1.1	41.3	1.7	6.6	1.0	0.03	0.02	0.04	0.39	0.02	1.24	0.38	44.36	0.05	0.19	0.55		
	小玉 83	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.2	1.3	46.2	1.5	8.2	1.0	0.02	0.02	0.04	0.33	0.02	1.84	0.53	37.61	0.04	0.16	0.50		
	小玉 84	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.9	0.3	1.4	47.2	1.4	7.2	1.0	0.03	0.03	0.03	0.34	0.02	1.86	0.53	37.18	0.03	0.19	0.44		
	小玉 85	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.2	1.8	53.6	1.2	6.5	0.9	0.03	0.01	0.04	0.64	0.02	1.37	0.40	32.26	0.03	0.14	0.31		
	小玉 86	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.2	0.1	1.3	43.3	1.6	7.6	1.1	0.03	0.03	0.05	0.71	0.02	1.58	0.49	40.27	0.05	0.20	0.46		
	小玉 87	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.2	0.3	1.1	45.0	1.6	7.4	1.0	0.04	0.02	0.05	0.69	0.02	1.56	0.49	38.94	0.05	0.20	0.38		
	小玉 88	緑色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.6	3.1	76.7	0.1	1.7	0.4	0.04	0.01	0.04	0.56	0.01	0.59	0.13	15.22	0.01	0.06	0.15		
	小玉 89	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.5	0.2	1.3	43.2	1.8	6.8	0.7	0.02	0.02	0.06	0.12	0.01	0.47	0.15	43.86	0.04	0.18	0.54		
	小玉 90	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.3	1.6	45.2	1.7	5.0	0.9	0.02	0.02	0.06	0.14	0.02	0.61	0.18	42.77	0.05	0.17	0.39		
	小玉 91	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.4	2.6	75.8	0.2	1.3	0.6	0.02	0.01	0.03	0.13	0.01	0.31	0.10	17.54	0.02	0.08	0.20		
	小玉 92	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.4	2.9	70.3	0.4	2.4	0.5	0.02	0.02	0.03	0.11	0.01	0.51	0.16	21.18	0.02	0.10	0.23		
	小玉 93	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.2	2.9	66.1	0.7	2.5	0.7	0.02	0.02	0.03	0.12	0.01	0.38	0.12	25.16	0.02	0.11	0.18		
	小玉 94	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.0	0.2	1.3	41.7	1.8	5.2	1.0	0.02	0.02	0.05	0.14	0.02	0.66	0.19	45.99	0.05	0.21	0.38		
	小玉 95	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.2	2.4	67.1	0.6	3.1	0.6	0.02	0.02	0.03	0.11	0.01	0.37	0.09	24.34	0.02	0.11	0.21		
	小玉 96	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.2	0.8	3.8	78.7	0.1	0.8	0.6	0.03	0.02	0.02	0.14	0.01	0.23	0.08	13.41	0.01	0.06	0.13		
	小玉 97	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	1.1	0.7	3.6	77.9	0.0	0.7	0.6	0.02	0.01	0.02	0.14	0.01	0.25	0.09	14.64	0.02	0.08	0.15		
	小玉 98	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.4	3.4	70.6	0.4	2.6	0.5	0.04	0.02	0.04	0.11	0.01	0.27	0.10	20.60	0.02	0.08	0.23		
	小玉 99	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.8	0.2	2.3	71.3	0.4	2.4	0.5	0.02	0.02	0.02	0.11	0.01	0.33	0.09	21.14	0.03	0.09	0.19		
	小玉 100	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.7	0.4	3.1	72.5	0.4	1.7	0.7	0.03	0.01	0.03	0.13	0.01	0.32	0.10	19.61	0.01	0.09	0.19		
	小玉 101	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.6	0.1	1.5	47.3	1.5	5.2	0.7	0.05	0.02	0.04	0.14	0.02	0.93	0.25	41.01	0.04	0.15	0.50		
	小玉 102	赤色	透明	カリ鉛	材質Ⅰ (新)	0.4	0.1	1.5	50.3	1.4	5.5	0.7	0.04	0.02	0.04	0.13	0.01	0.58	0.14	38.44	0.05	0.18	0.35		
	小玉 103	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.5	0.2	1.9	54.6	1.1	6.6	2.4	0.02	0.02	0.04	0.14	0.02	0.04	0.02	31.85	0.03	0.14	0.47		
	小玉 104	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.8	0.3	3.3	68.4	0.4	3.3	1.8	0.03	0.02	0.02	0.09	0.01	0.05	0.01	21.13	0.03	0.09	0.30		
	小玉 105	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.5	0.3	1.4	43.1	1.6	6.3	5.5	0.02	0.02	0.08	0.10	0.02	0.10	0.02	40.25	0.04	0.19	0.46		
	小玉 106	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.6	0.4	1.5	42.9	1.5	7.4	3.1	0.02	0.03	0.05	0.14	0.02	0.05	0.02	41.57	0.04	0.17	0.50		
	小玉 107	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.3	0.2	1.4	42.7	1.6	6.6	3.7	0.02	0.02	0.05	0.12	0.02	0.09	0.02	42.37	0.04	0.19	0.49		
	小玉 108	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.5	0.2	1.3	43.4	1.5	6.2	4.3	0.03	0.02	0.06	0.11	0.02	0.09	0.02	41.46	0.05	0.18	0.56		
	小玉 109	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.8	0.1	1.4	45.9	1.5	5.8	4.2	0.02	0.02	0.05	0.11	0.02	0.09	0.02	39.48	0.04	0.20	0.42		
	小玉 110	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.7	0.2	1.4	42.8	1.2	5.4	3.4	0.03	0.02	0.04	0.13	0.02	0.10	0.02	43.80	0.05	0.22	0.50		
	小玉 111	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.3	0.2	1.5	42.8	1.6	8.3	2.9	0.02	0.02	0.05	0.16	0.02	0.05	0.02	41.47	0.06	0.19	0.39		
	小玉 112	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.6	0.1	1.3	41.5	1.6	6.8	4.1	0.02	0.02	0.05	0.11	0.02	0.10	0.02	42.93	0.04	0.22	0.42		
	小玉 113	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.5	0.2	1.2	40.3	1.7	6.6	4.9	0.02	0.02	0.05	0.11	0.02	0.10	0.02	43.44	0.04	0.20	0.58		
	小玉 114	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.7	0.3	1.5	43.7	1.5	7.2	2.9	0.02	0.02	0.05	0.11	0.03	0.06	0.02	41.37	0.05	0.16	0.40		
	小玉 115	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.9	0.2	1.4	42.8	1.6	7.1	2.9	0.02	0.02	0.04	0.11	0.02	0.06	0.02	42.18	0.05	0.18	0.53		
	小玉 116	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.8	0.2	1.3	42.5	1.7	6.5	3.8	0.02	0.02	0.05	0.11	0.02	0.09	0.02	42.11	0.04	0.16	0.48		
	小玉 117	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.3	0.3	1.3	42.3	1.7	6.6	3.7	0.03	0.02	0.05	0.11	0.02	0.09	0.02	42.75	0.04	0.17	0.58		
	小玉 118	白色	不透明	カリ鉛	物質Ⅰ (新) + CaF ₂	0.6	0.2	1.4	44.9	1.7	6.4	3.7</													

苫小牧市美術博物館 紀要

第10号
(令和6年度)

発行日 令和7年3月
編集・発行 苫小牧市美術博物館
〒053 - 0011
北海道苫小牧市末広町3丁目9番7号
TEL. 0144 (35) 2550
FAX. 0144 (34) 0408
印刷 有限会社ダイシン印刷

